

# 韓国語の「文字と発音」導入の問題について

－日本語母語話者のための韓国語教科書の分析を通して－

川越菜穂子

## 1. 問題のありか

韓国語<sup>1</sup>は日本語と文法が似ており、共通する漢字語が多いなど日本語母語話者にとって学習しやすい言語であることは確かだが、「簡単そうだ」と思って始めた学習者にとって入門期で挫折しがちなのが文字表記と発音の習得である。授業中なんとなく話せているようでも書かせるとハングルの綴りが“めちゃくちゃ”という学生が結構いる。教師のモデル発音のあとについて反復する練習は流暢にできるが、モデルなしではとたんにたどたどしくなり、言いたい単語を韓国語で即座に口に出すことができない。一年たってもまだ流暢に言えない、読めない場合、学習者はもちろん教師にとっても大きなストレスになる。そのような学習者が抱える問題は、単語を正確な音で覚えていないこと、そして、ハングルの表記と発音の対応が頭の中で定着していないことである。その原因を学習者の自習不足にのみ帰することはできないだろう。使用教材や教え方にも学習効果を高める工夫が求められる。入門用教科書の「文字と発音」部分について以前から問題が指摘されながら、いまだに昔のままの教科書も多い。

梁炫玉（2008）は「音韻論や音声学的な説明が中心となっていない。学習者に音韻論や音声学的な知識がなければ十分な学習効果は期待できないからである」としながら、既存の教科書が母音表、子音表を提示しながらそれについての説明が十分でないと批判している。また、「発音というのは外国語を学習するとき、初期段階で体得するものであるので最初から体系的に教育を行う必要がある」と述べているが、ここで浮かぶ疑問は、

- ・韓国語の場合、体系的な発音指導とはどのような範囲を指すのか。
- ・何をどのように説明すれば十分なのか。
- ・そもそも韓国語の発音の体系すべてを初期段階で体得できるものなのか。

というものである。入門用教科書を数冊比べてみても、次のようなことに気づく。

- a. 音韻体系の捉え方が統一されていない。

---

1 韓国語、朝鮮語、コリア語などの呼称があるが、本稿では「韓国語」を便宜上使うことにする。

- b. 説明のための用語、発音記号（カタカナ表記の読みを含む）も不統一である。
- c. 日本語母語話者にわかりやすい提示がされていない。
- d. 理解や学習を助ける図表がない。
- e. はじめの「文字と発音」部分が長すぎる。

例えば、母音は「基本」とされるものが8個、10個と統一されていない。子音も平音、激音、濃音の3種類のうち、平音と激音を「基本子音」として濃音を別扱いにすることがある。これは、「文字と音声の峻別ができていない」（湯谷幸利（2007））ことが原因で、『訓民正音解例』の制字原理に従うと、現代語（ソウル方言）の「基本母音（字）」は10個となり、「基本子音（字）」は13個で濃音は含まれない<sup>2</sup>。

同じことが原因で用語の不統一も起きている。「母音」「子音」は音声で、「母音字母」「母音字」、「子音字母」「子音字」は文字であるが、両者の使い方に混同が見られる。また、「単母音」「合成母音」「複合母音」「二重母音」、「基本子音（字）」「複合子音（字）」「合成子音（字）」などの用語とそれが指すもので不統一が見られる。

第二言語学習は通常まず発音を知り、次に表記を覚えるという手順で進められるものだが、韓国語の場合は制字原理が優先されることが多い。これは字形を理解し覚えることを優先したもので、この方法による授業の進め方は根強くある。

母音の発音の説明を補助する唇の形の絵や写真、子音の調音点を示す口腔内の模式図などを示している教科書は多くない。特に、「母音三角形」を示すものはわずかである。終声の発音には調音点の意識化が欠かせないので、ことばによる説明に図を加えることは有用であると考ええる。また、日本語の五十音表にあたる反切表（カナダラ表）をほとんどの教科書が掲載するが、韓国語母語話者の子どものための“読み書き”練習に使われるものそのまま、非母語話者に配慮していると思えないものが多い。

本稿では、韓国語入門用の教科書で「文字と発音」がどのように扱われているかを見てその問題点を確認し、日本語の文字と発音の指導方法と比較しながら、学習者にとってより負担が少なく、より効果的な提示と指導の方法を考察することを目的とする。

## 2. 母音の提示方法

多くの教科書が「基本母音」ないし「基本母音字」「基本母音字母」として次の10個をあげる。これを「基本母音字10個型」と呼ぶことにする。

---

2 『訓民正音解例』（1446年刊行）では初声（子音）17音、中声（母音）11字とする。その後の音韻変化で数が減る。

ㅏ[a]、ㅑ[ja]、ㅓ[ɔ]、ㅕ[jɔ]、ㅗ[o]、ㅛ[jo]、ㅜ[u]、ㅠ[ju]、ㅡ[w]、ㅣ[i]

そしてそれ以外の母音は「合成母音（字）」「重母音」「二重母音」などと分類される。

一方、一部の教科書は次のように「基本」にㅏ[ja]、ㅓ[jɔ]、ㅛ[jo]、ㅠ[ju] を含めず、ㅓ[e]、ㅕ[ɛ] を加えた 8 個を「単母音」としてあげる。これを「単母音 8 個型」と呼ぶことにする。

ㅏ[a]、ㅓ[ɔ]、ㅗ[o]、ㅜ[u]、ㅡ[w]、ㅣ[i]、ㅓ[e]、ㅕ[ɛ]

「単母音 8 個型」は発音による分類で、この立場では、「基本母音」とは「単母音」であるべきで、半母音が加わったㅏ[ja]、ㅓ[jɔ]、ㅛ[jo]、ㅠ[ju] は単母音ではなく、ㅓ[e]、ㅕ[ɛ] は単母音になる。「基本母音字 10 個型」はそもそも字形による分類で、10 個の母音字を組み合わせで「合成母音（字）」ができると説明する。しかしその場合、なぜㅏをㅣ+ㅏの「合成」として合成母音字に含めないのかという疑問は残る。

熊谷明泰（2000）は、1960 年代から 90 年代までに日本で出版された韓国語教材（主に教科書。会話集、辞書類を含む）125 種を対象に、主に母音をめぐる説明と用語の使い方を類型別にまとめ、その取扱いに批判的検討を加えている。それによると、母音の分類方法は次の 7 種類である。（単母音の扱いにより、順番を入れ替えた。また教材の数を記入した。「」の有無は熊谷明泰（2000）による）

表 2-1 教科書に見る母音（字）の分類（熊谷明泰（2000）より）

|   | 母音（字）の分類                                   | 教材   |
|---|--------------------------------------------|------|
| ① | 基本母音字 10 個（ㅏㅑㅓㅕㅗㅛㅜㅠㅣ）・合成母音字 11 個           | 75 種 |
| ② | 単母音 8 個（ㅏㅓㅗㅜㅣㅓㅕ）・重母音 13 個                  | 12 種 |
| ③ | 単母音 8 個（②に同じ）・「半母音 + 単母音」12 個・「二重母音」1 個    | 8 種  |
| ④ | 単母音 10 個（②の単母音 + ㅓㅕ）・二重母音 11 個             | 11 種 |
| ⑤ | 「単母音」10 個（②の単母音 + ㅓㅕ）・「合成母音」10 個・「二重母音」1 個 | 1 種  |
| ⑥ | 「単母音」9 個（②の単母音 + ㅓ）・二重母音 12 個              | 2 種  |
| ⑦ | 「単母音」9 個（②の単母音 + ㅓ）・「合成母音」11 個・「二重母音」1 個   | 1 種  |

①は字形、すなわち『訓民正音解例』の制字原理によるもので、先の「基本母音字 10 個型」である。②～⑦は、「単母音 8 個型」のバリエーションで、それに、ㅓㅕとㅕㅓの両方あるいはㅓを単母音（ㅓ/ɸ/、ㅕ/y/）として含めるか、二重母音（ㅓ/we/、ㅕ/wi/）として含めないかにより、9 個または 10 個となる。また、②と③、④と⑤、⑥と⑦の違いはいずれもㅓ[wui] を他の「合成母音」に含めるか、これのみ二重母音として別にするかによる。

主に 2000 年以降に出版された教科書で筆者が調べた 23 種<sup>3</sup>では、ㅜㅑは「ウェ」と発音される二重母音の扱いで、単母音に含めるものではなく<sup>4</sup>、①②③のいずれかであった。①は 17 種、②③合わせて 6 種<sup>5</sup>で、表 2-1 の比率とあまり変わらない。新しく学習を始めた学習者は、これらが単母音で発音されることもあるということを知らないだろう。韓国の「標準発音法」(韓国文教部告示 1988) 第 4 項では「ㅏㅑㅓㅕㅗㅛㅜㅝㅟㅡ」は単母音として発音する」としてこれを原則とし、「ㅜㅑを二重母音として発音することもある」とし、これを許容としている。「国語」の規定が実態に合わなくなっている<sup>6</sup>例の 1 つであろうが、この点は最近のほとんどの教科書が実態に合わせていると言える。

以下、発音<sup>7</sup>に基づく提示方法と制字原理に基づく提示方法の説明について教科書の扱いを見る。

## 2.1 発音に基づく「基本母音」の提示方法と説明：単母音 8 個型

野間秀樹 (2008) は「教科書は学習言語の対照言語学的な視座から編まれねばならない」とし、次の表 2-2 のように、韓国語の単母音を「あいうえお」の順に提示し、かつ、日本語の母音を基準となる最も左の列におくことが重要だとしている。

表 2-2 野間秀樹・村田寛・金珍娥『はばたけ！韓国語』(第 2 版) 朝日出版社 2008

| 日本語の単母音 | 字母 | 発音表記             | 発音                                 |
|---------|----|------------------|------------------------------------|
| あ       | ㅏ  | [a]              | 日本語の「あ」とほぼ同じ。口を大きく開けて「あ」           |
| い       | ㅣ  | [i]              | 日本語の「い」と似るが、日本語に「い」よりも口を横に引いて「い」   |
| う       | ㅡ  | [u]              | ㅣと同じ口の形のままで「う」 平唇の「ウ」              |
|         | ㅜ  | [u]              | 唇をすぼめ、円く前に突き出して「ウ」 円唇の「ウ」          |
| え       | ㅓ  | [e]              | 日本語の「え」とほぼ同じ。やや口を狭めて「え」 狭い「エ」      |
|         | ㅕ  | [ɛ]              | 日本語の「え」よりも口を開いて「え」 広い「エ」           |
| お       | ㅗ  | [o]              | 日本語の「お」よりも唇をすぼめ、円く前に突き出して「お」 狭い「オ」 |
|         | ㅛ  | [ɔ] <sup>8</sup> | 日本語の「お」よりも口を大きく開いて「お」 広い「オ」        |

3 B5 判で、主に大学、語学教室での使用を前提に開発されたもの。1 冊だけ独習用であるが放送で授業が行われる「NHK テレビでハングル講座」のテキストを加えた。

4 熊谷明泰 (2015) の教科書では、ㅜㅑをワ行音の二重母音に分類するが、「単母音でも発音される」として発音記号をㅜ/[we]/、ㅑ/[ɔ]/、ㅓ/[wi]/、ㅕ/[u]/ のように並記している。さらに音韻変化について詳しい注を加えている。塚本秀樹他 (1996) でも、ㅜ/[we]、ㅓ/[wi] としたあと、注書きでもととはㅜ[ɸ]、ㅓ[y] という音だったとしている。

5 野間秀樹他 (2010)、生越直樹他 (2011)、李潤玉他 (2012)、崔柄珠 (2014)、熊谷明泰 (2015)、金順玉 (2015) の教科書。

6 熊谷明泰 (2007) でこの 2 つの母音について韓国の国立国語院と国立国語研究院が行った調査について詳しく紹介している。

7 厳密には音韻と音声を区別すべきだが、ここでは「発音」または「音」とする。

8 ㅓは IPA 国際音声記号で表せば非円唇の [ɛ] になるが、英語の発音記号で [ɛ] は「ア」、[ɔ] は「オ」と発音されているため、日本の韓国語教育ではㅓ [ɔ] を採用している。(野間秀樹 (2007))

|         |   |         |
|---------|---|---------|
| ㅏ /a/   |   | ㅣ /i/   |
| ア       |   | イ       |
| ㅓ /u/   | ↔ | ㅡ /ɯ/   |
| ウ(円唇)   |   | ウ(平唇)   |
| ㅜ /ɛ/   | ↔ | ㅟ /e/   |
| エ(広めの口) |   | エ(狭めの口) |
| ㅑ /ɔ/   | ↔ | ㅛ /o/   |
| オ(非円唇)  |   | オ(円唇)   |

図 2-1

|       |       |
|-------|-------|
| ㅏ [a] | ㅡ [ɯ] |
| ㅑ [ɔ] | ㅣ [i] |
| ㅓ [o] | ㅜ [ɛ] |
| ㅕ [u] | ㅟ [e] |

図 2-2

このように示せば、日本語の単母音と明確に対比され、「う」「え」「お」に韓国語の母音が2つずつあることが一目でわかる。「基本母音字 10 個型」でも説明の中では「日本語の「あ」と同じ」といったように日本語の母音と比較するのが普通だが、このように日本語の母音 5 個と対照できるのは「単母音 8 個型」ならではである。ただし、このタイプの教科書 6 種のうち、このように「あいうえお」順に対照して示しているものは、野間秀樹他 (2010)、李潤玉他 (2012)、金順玉 (2015)、崔柄珠 (2014) の教科書の 4 種だった。ただし、崔柄珠 (2014) の教科書は列が左からハングルの字母、発音記号、日本語のカナの順になっている。熊谷明泰 (2015) の教科書は「あいうえお」順で

はなく、図 2-1 のように配置して音の関連性を示し、生越直樹他 (2011) の教科書は図 2-2 のように口の開きおよび舌の位置<sup>9</sup>あるいは字形によって分け、日本語の母音も添えていない。

野間秀樹他 (2008) の教科書では、単母音 8 つの説明のあとにさらに次の「母音三角形」(図 2-3) を示して日本語の母音との違いを可視的に示している。

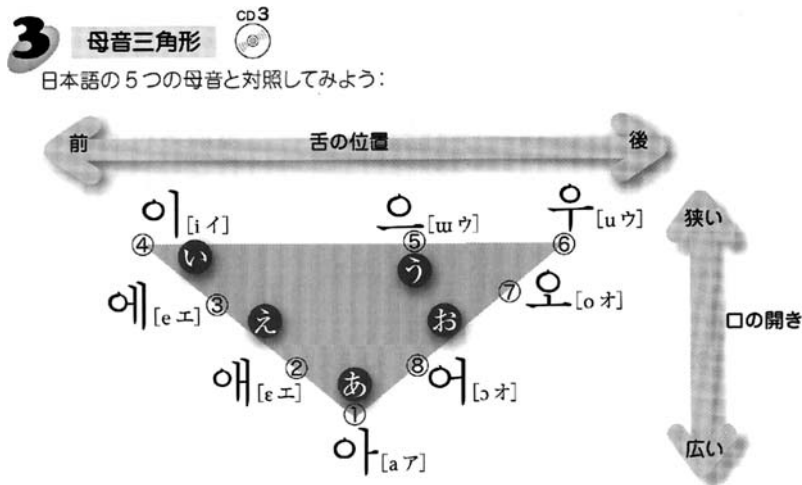


図 2-3 野間秀樹他 (2008) の教科書

単母音 8 個型では、単母音をすべてあげられるので、母音三角形によって基本母音の全体像を示し、日本語の単母音との違いを説明することができる。基本母音字 10 個型ではこのようなことはできない<sup>10</sup>。次の図 2-4 は熊谷明泰 (2015) の教科書の単母音の説明に付されたもの

9 図 2-3 の母音三角形のオから番号とは逆回りに読むとそうなる。

10 合成母音字を導入した後であらためて単母音が 8 個であることを説明し母音三角形を出すことはで

である。韓国語の母音のみが示され、日本語の母音との関係は図示されていない。

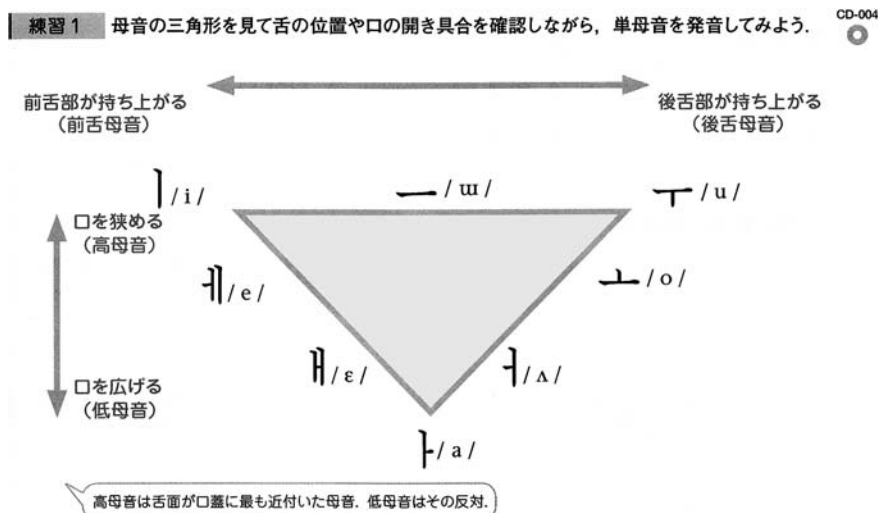


図 2-4 熊谷明泰 (2015) の教科書

野間秀樹 (2007) は「母音四角形を簡略化した、こうした母音三角形で母音の性質を示しながら、学習者と共に口の開きや舌の位置を確認することは言語教育上も大変有用である」と述べている。母音三角形を示している教科書は 23 種中、この熊谷明泰 (2015) と野間秀樹他 (2010) の教科書 2 種のみだった。日本語の母音と比較するなら、同じ母音三角形に韓国語と日本語の基本母音を両方示した図 2-3の方がより有用であると考ええる。

母音三角形は簡略化したもので必ずしも正確に口の開きや舌の位置を示しているわけではないが、各母音の位置関係を知るにはわかりやすい。図 2-3 を見れば、日本語の母音はすべて韓国語の母音の「三角形」の内側にあることがわかる。つまり、日本語を話すときは韓国語を話すときより全般に口をあまりあけないということである。言い換えると、日本語母語話者が韓国語を話すときは意識して口を大きめに動かす必要がある。このことは日本語とほぼ同じとされる「ア」と「ト」、「イ」と「リ」においても同様である。

ほとんどの教科書では、「ト」は「日本語の「ア」のように発音する」というような説明をしているが、前田直彦 (2013)<sup>11</sup>は「日本語の「ア」よりも少し大きめに口を開きます」としている。同様の説明をしているものでは、布袋敏博他 (2008) の教科書「日本語の「あ」よりも意識的に大きく口を開く」、高島淑郎 (2002) の教科書「日本語の「ア」とほぼ同じで、口

11 き、実際にそのようにしているという教師もいる。

12 この教材は『韓国語発音クリニック』というタイトルの通り、初級学習者だけでなく中上級学習者でも「自分のクセを知り、正しい口の動き・舌の位置を知り、少しでも正しい発音に近づこうという意識を」持つようにし、日本人にありがちな発音の癖をあげて「正しい発音」の方法を詳しく解説したものである。ただし叶については特に問題になるとは取り上げていない。

をやや大きめに開け、はっきりと発音します」があった。日本語母語話者が日本語を発音するときにも当然個人差があり、比較的是っきりと口を開いて発音する人と、あまり開かずに発音する人がいる。後者のタイプの人が日本語の「ア」と同じだと思って「아」と発音すると、「어」に聞き取られることがある。長渡陽一（2009）で「ㅏは暗い「ア」」であると説明するのはまさにこのことに当てはまると考えられる。梁炫玉（2008）でも「ㅏ」は、日本語の“ア[a]”と同じように発音しても差し支えはないものの、意識してほしいのは下のあごの動きである。日本人が“ア”と発音する際は下あごをほとんど動かさずに発音する傾向があるが、韓国語の「ㅏ」を発音する際は意識的に顎を開くことが大事である」と説明する。学習者の負担を減らすという点では母語話者が聞いて不自然と感じない限り、細かな差異まで気かけさせるべきではないだろうが、「全般的に口を大きくはっきり動かす」という意識は持たせる必要がある。その意味でも母音三角形は有用であろう。

## 2.2 制字原理に基づく「基本母音字」の提示方法と説明：基本母音字 10 個型

韓国で開発され日本で発行された韓国語教科書に次のような説明をしているものがある。

韓国語の基本母音である「ㅏ」、「ㅑ」、「ㅓ」はそれぞれ「太陽」「地」「人」を象徴しています。他の母音は、この3母音を組み合わせて創られています。韓国語の最も根本的な特徴が、この基本母音の組み合わせで創られたというのは大変素晴らしいことです。世宗大王はこの基本母音の組み合わせを通して、陰性と陽性を描写する効果を創り出しました。太陽が東から昇る様子を描写した「ㅏ (ㅏ)」は陽性を、西に沈む様子を描写した「ㅑ (ㅑ)」は陰性を表します。また、太陽が地平線から昇っていく様子を描写した「ㅓ (ㅓ)」は陽性を、地平線の下に沈む様子を描写した「ㅕ (ㅕ)」は陰性を表しています。このようにしてできた母音に一画 (y 音) を加え、「ㅗ ㅛ ㅠ ㅜ」というヤ行の母音を創りました。

（慶熙大学国際教育院 日本語監訳 姜奉植『日本人のための韓国語ナビ 1 初級』国書刊行会 2009）<sup>12</sup>

『標準語規定』が「単母音」としていない「ヤ行の母音」を含む「ㅏ ㅑ ㅓ ㅕ ㅠ ㅜ ㅗ ㅛ」を「基本」とすることに“こだわり”があるとすれば、まさにこの説明文にあるようにその「創り方」が「大変素晴らしい」と賞賛されるところにあるのかもしれない。あるいはただ、

12 この教科書では、この説明のすぐ下に単母音 8 個「ㅏ ㅑ ㅓ ㅕ ㅠ ㅜ ㅗ ㅛ」の唇の形を示した絵と、それらの母音の口腔内での舌の位置を示した絵が説明なしに掲載されている。そしてそのあとに、「基本母音」10 個の書き方の練習がつづく。

母語話者が読み書きを学習する際にこの母音字の並びを使い、それをそのまま外国語教育の教材に当てはめただけとも考えられる。しかし、最も大きな理由は、この「基本の字に画（かく）を加えていく」という説明の方がわかりやすく、字形を覚えるのに適していると感じられているためと考えられる。しかし、この方法をとる場合、用語に不正確さの問題が生じ、また一度に10個覚えることが負担にならないよう、提示の仕方に工夫が必要になる。

まず、用語の使い方の問題は、文字の説明なのか発音の説明なのかの区別がつけずに曖昧にならざるを得ないということである。木内明（2013）の教科書でも、「母音字」「子音字」<sup>13</sup>という語を使っているが、この教科書の旧版である木内明（2004）では「韓国語には10個の基本母音があります」としていた。これを改訂版で「10個の基本となる母音字があります」と改めている。しかし、その説明のすぐ上には「この課では基本の母音を学習します」とあるので、なお完全には正確とは言えないのである。

「基本母音」は音声学的には「単母音」を指すから、半母音[j]を含むㅏㅑㅓㅕㅗㅛㅜㅟを「基本母音」と呼ぶのは誤りである。これを「基本となる母音字」のように制字原理上の説明にしたわけだが、いずれにしろ日本人の感覚ではア行とヤ行を1音ずつ代わる代わる唱える感じで、日本語の五十音表では「あいうえお」からは離れた行にあるヤ行の音を「基本」とするのはやや違和感を覚えるだろう。また、単母音であるㅏ、ㅑが他の二重母音とともに「合成母音（字）」になってしまう不自然さも免れない。

「基本母音字」10個を採用する教科書は制字原理を優先させているわけであるから、字形の示し方に配慮が必要である。次の図2-5のAのようにそのまま縦（または横）に列挙するだけのものと、字形の区別を意識したレイアウトに工夫が見られるものがある。Bは「縦棒系」（縦棒に短い棒を加えるもの）と「横棒系」（横棒に短い棒を加えるもの）に分けたもの、Cはさらにヤ行と列を分ける。わずかな違いでも見やすさが変わる。

また、ㅏㅑㅓㅕㅗㅛㅜㅟを第1課で子音の一部とともにはじめに教え、第2課でヤ行のㅏㅑㅓㅕㅗㅛㅜㅟを教えるという教科書もある。「縦棒系ㅏㅑ」は口を縦に、横棒系ㅓㅕは口をとがらせ、棒1本

| A | B | C |
|---|---|---|
| ㅏ | ㅏ | ㅏ |
| ㅑ | ㅑ | ㅑ |
| ㅓ | ㅓ | ㅓ |
| ㅕ | ㅕ | ㅕ |
| ㅗ | ㅗ | ㅗ |
| ㅛ | ㅛ | ㅛ |
| ㅜ | ㅜ | ㅜ |
| ㅠ | ㅠ | ㅠ |
| ㅡ | ㅡ | ㅡ |
| ㅣ | ㅣ | ㅣ |

図2-5 「基本母音字」10個の配置

13 「母音字母」「子音字母」の「字母」というのは文字のパーツを表し、「母音字」「子音字」とするより正確だと思うが、音声学の知識のない学習者には「字母」という用語はなじみがないうえに「母音」と見た目が紛らわしい。「母音字」「子音字」の方がわかりやすいだろう。



ㄹ[ui]（これをワ行に含めるものと含めないものがある）

〈基本母音字 10 個型の教科書〉

- ・ 11 個すべて列挙するだけのもの ㅏ、ㅑ、ㅓ、ㅕ、ㅗ、ㅛ、ㅜ、ㅠ、ㅡ<sup>17</sup>
- ・ 分類して示すもの
  - － 塚本秀樹他（1996）（列挙した字の上に分類を示す）  
単母音 [y] のつくもの [w] のつくもの 二重母音  
ㅖ ㅗ ㅑ ㅓ ㅕ ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ ㅡ  
ㅖ ㅗ ㅑ ㅓ ㅕ ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ ㅡ
  - － 入佐信宏他（2002）：「え」の音 ㅖ ㅗ  
「いえ」の音 ㅖ ㅗ  
「わ行」の音 ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ ㅖ ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ
  - － 金順玉他（2014）：「合成母音字母（1）」 ㅖ ㅗ ㅑ ㅓ ㅕ  
「合成母音字母（2）」 ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ ㅖ ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ
  - － 河村光雅（2013）：「エ」と「イェ」 ㅖ ㅗ ㅑ ㅓ ㅕ  
「ワ」の仲間 ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ ㅖ ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ  
「ウエ」の仲間 ㅖ ㅗ ㅑ ㅓ ㅕ
  - － 高秀賢（2006）：母音「ㅣ」をつける合成母音 ㅖ ㅗ ㅑ ㅓ ㅕ ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ  
母音「ㅏ、ㅑ、ㅓ、ㅕ」をつける合成母音 ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ ㅖ ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ  
合成母音 ㅡ

基本母音字 10 個型の教科書で「合成母音字」の分類をするものは、基本的にはヤ行とワ行に分けるものだが、基本母音字に入れていなかった「え」の音がここに加わるため統一的な分類ができない。いずれにしろ 11 個すべてを 1 列に列挙するだけの“不親切な”ものよりは配慮が感じられる。

「合成母音字」を見て学習者が当惑するのはこの字形の複雑さである。ヤ行の二重母音の場合、母音 ㅣ[i] が短い棒になって縦か横につくというような説明がされるが、ワ行の方は ㅏ[u] との組み合わせだけでなく、ㅓ[o] との組み合わせがあり、その組み合わせ方の規則性が容易には見えず学習者にはわかりにくい。ただ列挙するのではなく次のような見やすさの工夫がほしい。

17 順序は教科書により若干の違いがある。また、他の提示の仕方のもも含めて母音字母単独で示すものと、「ㅇ」をつけて示すものがある。ここでは字母単独で示すものに統一した。

李潤玉他（2012）

半母音 w + 単母音

$$\begin{array}{lcl}
 \text{오} \left\{ \begin{array}{l} + \text{ㅏ} \rightarrow \text{와} \\ + \text{ㅓ} \rightarrow \text{왜} \\ + \text{ㅣ} \rightarrow \text{외} \end{array} \right. & & \text{우} \left\{ \begin{array}{l} + \text{ㅏ} \rightarrow \text{워} \\ + \text{ㅓ} \rightarrow \text{웨} \\ + \text{ㅣ} \rightarrow \text{위} \end{array} \right.
 \end{array}$$

また、河村光雅（2013）の教科書では、「ワ」の仲間は、短い線が2つとも外側あるいは内側に向いているものはないと説明し、「우」「오」のような組み合わせがないことを示している。いずれも教室では教師が説明するところだろうが、独習者には教科書に記載がほしい説明である。学習がある程度進んだ学習者には、次のように「陽母音」「陰母音」<sup>18</sup>を使った説明も知識を整理するのに役立つだろう<sup>19</sup>。新大久保語学院他（2010）でも「合成母音」の導入で「陽母音」「陰母音」の原則を使って説明している。

浜之上幸（2012）『韓国語入門Ⅰ』放送大学

合成母音字（ㅑ、ㅓ、ㅕ以外）

|     |    |    |      |    |
|-----|----|----|------|----|
| 陽母音 | ①ㅏ | ②ㅓ | 中性母音 | ⑤ㅣ |
| 陰母音 | ③ㅗ | ④ㅜ |      |    |

陽母音同士もしくは中性母音と、陰母音同士もしくは中性母音と組み合わせるのが原則。

$$\begin{array}{llll}
 \text{①+②} & \text{ㅑ} & \text{①+⑤} & \text{ㅓ} \\
 \text{②+⑤} & \text{ㅕ} & \text{①+②+⑤} & \text{ㅗ} \\
 \text{③+④} & \text{ㅜ} & \text{③+⑤} & \text{ㅝ} \\
 \text{③+④+⑤} & \text{ㅟ} & & 
 \end{array}$$

### 3. 子音の提示の方法——「基本子音」とは何か

子音においても発音に基づくか制字原理に基づくかで提示方法が分かれる。制字原理によるものは母音以上に学習者にとって“納得しにくい”ものがある。文字と音の区別の混乱はここでも見られ、「基本子音」に対し「合成子音」「複合子音」などと呼んでいる教科書がある。この用語を使うなら、いずれも「基本子音字」に対し「合成子音字」「複合子音字」と呼ぶべきである。母音は、「基本母音」と「合成母音」（二重母音、半母音+単母音）のように分類しても音声学的に問題にはならないが、子音の「基本」「合成」は字形であって音による分類には

18 「陽母音」「陰母音」の説明で「明るい／暗い感じの音」などとされることがある。李志暎（2010）でも「小さい太鼓の音は軽くて明るい「とんとん（똥똥）」、大きい太鼓の音は重い感じの「どんどん（등등）」です」としているが、母語話者でないとわからない感覚だと思う。ㅏ[a] はともかく円唇のㅓ[o]が明るい感じはしないだろう。2.2 で引用した慶熙大学国際教育院の教科書にあるような字形に基づく説明の方がわかりやすいし、朱子学の宇宙観に基づくことにも触れた方が興味をもてるだろう。

19 金順玉他（2014）でも第1課の「母音字母の原理」で陽母音、陰母音と合成母音字母の関係に触れているが、「合成母音字母」の導入とここでは説明に使用していない。

ならない。したがって、このような名称は使わず、一律に「子音」とし、「平音」、「激音」、「濃音」と分類し、その名称とともに子音を覚えるのが妥当だと思われる。平音、激音、濃音の区別は、その発音が苦手な日本人にとって学習が進んでからもずっと問題になるからである。もちろん字形の説明をするには「基本」とそれ以外との関係を示すのは学習上有用であるが、「平音の子音字を基本とし、それに点画を加えて激音の子音字を、平音の子音字を並書して濃音を書き表す」とすればよい。次のような図示は字形と調音点の関連を知るにはわかりやすい。なお、この図はㄷ以外はすべて『訓民正音解例』の説明そのままである<sup>20</sup>。

金榮愛 (2015) の教科書

「基本子音」14 個<sup>21</sup>

- ㄱ (g ガ行) → ㅋ (k カ行)
- ㄴ (n ナ行) → ㄷ (d ダ行) → ㄸ (t タ行) → ㄹ (r ラ行)
- ㄴ (m マ行) → ㅁ (b バ行) → ㅂ (p パ行)
- ㄴ (s サ行) → ㅈ (j ジャ行) → ㅊ (ch)
- ㅇ (無音) → ㅎ (h ハ行)

「基本子音」と言う場合、この教科書のように激音を含めた 14 個とするのが一般的で、次節で述べる反切表でも激音を含む。反切表は韓国語を音節単位で書き表す方法を習い覚えるために作られたと考えられているが、反切表にある字を基本とし、これに母音字母を加えて「合成母音」を表し、子音字母を加えてパッチムを表すようになっている。現在、パッチムと呼ばれるものは終声で「下で支えるもの」という意味であると説明されるが、宋喆儀 (2009) によれば、20 世紀中盤以前には「横にパッチム」という捉え方があり、例えば「ㄱ」の「ㄱ」のパッチムをつければ「ㄱ」になる」のように説明されることがあったという。さらに、濃音も同様にパッチム（この場合「自体パッチム」と呼ばれる）をとらえ、例えば「ㄱ」は「ㄱ+ㄱ」ではなく「ㄱ+ㄱ」であったという。平音と激音を「基本」とし、濃音を「それ以外」とする“不思議な”扱いも、「正音」創製者の意図がどうであったかはともかく、そう考えれば納得はいく<sup>22</sup>。

平音、激音、濃音という分類でも問題となる子音字が喉頭摩擦音のㅎ[h] である。韓国の学校文法では平音に含めているようで、今はそれが“常識”とも言われるが、激音とする研究者

20 『訓民正音解例』ではㄷは加画によらない「異体」としているが、調音点がㄷ、ㄴと同じなので同じ原理で教えて差し支えないだろう。

21 この教科書では 6 課でこの「基本子音」14 個を、8 課で「複合子音」として濃音ㄱㄷㄴㅁㅂㅈㅊ를提示する。

22 福井玲 (2013) では、濃音の「各自並書」は『訓民正音解例』の説明によれば 1 つの音素を 2 字で表す「二重字」ともとれるが、2 つの同じ子音の連続を表したものと解釈できることを示唆している。

もいる<sup>23</sup>。教科書でもㅎの扱いは統一的ではなく、「基本の子音」とするもの、平音に含めるもの、激音に含めるもの、いずれにも含めずㅎ単独で扱うものがあり、複数の教科書で独習する学習者にとっては戸惑う部分である。

#### 4. 母音と子音およびパッチムの提出順序

ここまで母音と子音をどのように分類し提示するかを見てきたが、教科書を作成するには母音と子音、そしてパッチムの提出順をどうするかが、大げさに言えば教材開発者の教授観を表すものとして大きな意味を持つ。言い換えれば、韓国語学習者にとって大きな負担となる文字と発音の学習を授業でいかにわかりやすく楽しくさせるか、それを指導する側としてどれほど配慮しているか、がわかるところである。

以下、母音（単母音と二重母音）、子音、パッチムの提出順により4つに分類してみた。

- A 母音は単母音と二重母音のすべてをまとめて導入し、そのあと子音を導入する。
- B 母音は単母音（基本母音字）と二重母音（合成母音字）を分け、その間に子音を導入する。
  - 1. パッチムをすべてまとめて導入する。
  - 2. パッチムを子音の種類ごとに分けて導入する。

教科書を開くと、A-1、A-2、B-1、B-2の順に課ごとの構成が複雑になっていくように見えるはずである。A-1のタイプはもっとも単純に列挙したもので、初級レベルの学習者が文字と発音の復習に使うにはいいかもしれないが、この順序で導入するとはじめのうち練習に使える語彙が母音ばかりに限られてしまう。また、母音と子音を学んでようやく文字と発音を全部覚えたと思ったら、さらにパッチムがつくものがあると知ることになる<sup>24</sup>。

提出順を見た23種の教科書では、母音（単母音と二重母音）をすべてまとめて導入するAのタイプは少なく（A-1のタイプは3種でA-2のタイプはなかった）、Bの、分けて導入するタイプが多かった。そのうち、子音をすべてまとめて導入するか、「基本子音／激音」「基本子音／激音／濃音」「平音／激音／濃音」のように分けて導入するかにかかわらず、パッチムをまとめて導入するB-1のタイプ（16種）の方がパッチムを子音の種類ごとに分けて導入するB-2のタイプ（4種）より多かった。以下にそのうちの13種の提出順を示す（字母および音の用語はそれぞれの教科書が使用するもの）。なお、上の分類では同じB-2に含まれてしまう

23 菅野裕臣共編『コスモス朝和辞典 第2版』白水社1991参照。

24 筆者自身が韓国語を学習し始めたとき、教科書を使わずに毎回講師の自作プリントで、このA-1のタイプの授業を受けた。延々と続く単調な文字と発音の指導に耐えた末に、新たにパッチムが出てきたときの“衝撃と裏切られた思い”は忘れがたい。

が、子音を反切表の基本子音字通りに提出するものと、平音の中で有声音化するかしないかで分けて示すものがあった。

〈A-1 のタイプ〉

① プルチョウ吉岡美愛・李英和『韓国語ゴーゴー』白水社 2012

- 1 課 基本母音字 10 個 ト ト ヲ ヲ ム ム ヲ ヲ
- 2 課 複合母音字 11 個
- 3 課 基本子音字 14 個 フ レ ヒ ヨ ロ ハ イ オ ス テ ヲ ヒ ヲ テ
- 4 課 濃音 ヲ ヒ ヲ ヒ ヲ ム ム
- 5 課 パッチム（代表音以外のものや 2 字のパッチムも含めすべて 1 つの表にあげる）

② 崔柄珠『おはよう韓国語 1』朝日出版 2014

- 1 課 母音：単母音、重母音ヤ行、重母音ワ行
- 2 課 子音：平音 フ レ ヒ ヨ ロ ハ イ オ ス、激音 ヲ ヒ ヲ テ ヲ テ、濃音 ヲ ヒ ヲ ヒ ヲ ム ム、有声音化
- 3 課 パッチム：鼻音、流音、口音

③ 野間秀樹・金珍娥・中島仁・須賀井義教『きらきら韓国語』同学社 2010

- 2 課 ハングルのしくみと母音：単母音、半母音＋単母音、二重母音
- 3 課 初声の子音：鼻音、平音、激音、濃音、流音
- 4 課 終声の子音：口音の終声 [p][t][k]、鼻音の終声 [m][n][ŋ]、流音の終声 [l]、終声規則と終声字母、2 つの子音字母からなる終声

①は 3 課になるまで子音が出てこないが、1、2 課の単語例や練習問題には子音が含まれている。②③は、はじめの課で母音をすべてまとめて導入し、単語例も母音のみのものに限定している。②は練習問題がほぼ単語だけであるが、③は「～예요? /이예요?」（～ですか；7 課の文型）を使って対話文の形の練習を入れている。

〈B-1 のタイプ〉

④ 高島淑郎『書いて覚える初級朝鮮語 改訂版』2002

- 1 課 基本母音字 10 個 ト ト ヲ ヲ ム ム ヲ ヲ
- 2 課 子音（1）基本子音（字）14 個のうち 9 個 フ レ ヒ ヨ ロ ハ イ オ ス
- 3 課 子音（2）基本子音残りの 5 個 激音 テ ヲ ヒ ヲ テ
- 5 課 濃音 ヲ ヒ ヲ ヒ ヲ ム ム



- 2 課 子音 1 (平音 1) 리로入
- 3 課 子音 2 (平音 2) 리로ス、有声音化
- 4 課 パッチム 로／「ん」の仲間로／「っ」の仲間리로のパッチム
- 5 課 子音 3 (激音) 리로立る
- 6 課 子音 4 (濃音) 리로从ス

⑨ 生越直樹・曹喜澈『韓国朝鮮語初級テキスト ことばの架け橋 改訂版』白帝社 2011

- 1 課 単母音、重母音 (1) や行系、平音 (1) 리로入る
- 2 課 平音 (2) 有声音化するもの 리로ス、有声音化  
激音、濃音、重母音 (2) ワ行系
- 3 課 終声 (パッチム) (1) 리로、終声 (パッチム) (2) 리ロ、連音化  
(2 文字の終声は 11 課と 18 課に分けて)

⑦⑧⑨は濃音のパッチム、2 字のパッチムをはじめの「発音と文字」で導入しない。また、⑧⑨は⑥同様、初声の子音は有声音化するものとししないものを分けて導入する。

〈B-2 のタイプ〉

⑩ 高秀賢『ミニマム韓国語』国書刊行会 2006

- 2 課 基本母音 10 個
- 3 課 子音 (平音) 리로로入ロス
- 4 課 子音 (激音・濃音) 리로立る 리로从ス
- 5 課 合成母音
- 6 課「発音変化の法則」パッチムのまとめほか

⑩は一見 B-1 のタイプだが、子音の種類ごとに練習問題でパッチムを入れ、「語の最初、語中、最後に来るときの音の違いに注意して発音しましょう」とし、発音の仕方も簡単に説明する。ただし、「パッチム」という用語は 6 課で一覧表を示したところではじめて提示する。また、平音の練習問題で「有声音化」という用語は使わずに語中が濁ることを説明。

⑪ 梁貞模・盧載玉『初級ハングルーコミュニケーションのために』新幹社 2005

- 1 課 母音字 (1) 아 이 유 에 오 ㅏ ㅓ、子音字 (1) 平音 리로ロ、母音字 (2) 이 이  
ㅓ ㅓ、パッチム (1) 리로ロ
- 2 課 子音字 (2) 平音 리로入ス、有声音化、子音字 (3) 激音 리로立る、母音字 (3)

二重母音

- 3 課 子音字 (4) 濃音ㅈㅊㅌㅍㅈㅊㅌㅍ, パッチム (2) ㅈㅊㅌㅍ, パッチム (3) 「二重パッチム」

⑫ 熊谷明泰『初級韓国朝鮮語教材 アリラン 改訂版』朝日出版社 2015

- 1 課 単母音 8 個ㅏㅑㅓㅕㅗㅛㅜㅝ 初声字のㅇと音節末子音のㅇ  
ヤ行音の二重母音、ワ行音の二重母音 (1) (2)、二重母音ㅓㅕ  
有声子音 (1) 鼻音ㅇㅁㅇ 有声子音 (2) 流音ㅇ (初声と同時に終声も)  
2 課 平音ㅈㅊㅌㅍㅈㅊㅌㅍ, 平音ㅈㅊㅌㅍㅈㅊㅌㅍの有声音化、音節末子音・連音化 [終声の初声化]  
(1)、激音ㅈㅊㅌㅍㅈㅊㅌㅍ・連音化 (2)、子音ㅈ (弱音化・無音化も説明)  
3 課 激音化、濃音ㅈㅊㅌㅍㅈㅊㅌㅍ, 濃音化、音節末子音の中和、子音の音素体系、子音群単純化 (いわゆる 2 字のパッチムとその連音化)

⑬ 李潤玉・酒匂康裕・須賀井義教・陸宗均・山田恭子『改訂版 韓国語の世界へ 入門編』朝日出版社 2012

- 1 課 単母音 8 個、初声：鼻音ㅇㅁㅇ・流音ㅇ、半母音 [j]+単母音、終声ㅇㅁㅇ  
2 課 初声：平音ㅈㅊㅌㅍㅈㅊㅌㅍ、有声音化、半母音 [w]+単母音、二重母音ㅓㅕ、連音化  
3 課 初声：激音ㅈㅊㅌㅍㅈㅊㅌㅍ、初声：濃音ㅈㅊㅌㅍㅈㅊㅌㅍ、終声：ㅈㅊㅌㅍ、濃音化

⑪⑫⑬の共通点は、1 課で母音に引き続き、先に有声音化をしない平音の鼻音と流音を導入し、同じ課でそれらのパッチムを導入する点である。これで「안녕」が読めるようになる。

学習者の性格や好み、学習習慣はさまざまであるから、一概にどのタイプの教科書がいいと言うことはできない。一目で母音と子音のすべてが見える A のタイプは、統一感や理屈を好む学習者には適しているかもしれない。B-2 のタイプは、子音がいくつあるのかがすぐには把握しにくい。しかし、どの教科書でも巻頭にハングルの構造を示してパッチムがあることも説明しているのだから、そのことを忘れないうちに 1 課から同じ子音字が初声に来る場合とパッチムになる場合を導入してもいいだろう。なによりそうすることで母音を並べる単語だけの練習に限定しなくてすむ。コースの始めに教室の表現として口頭で導入する「안녕하세요?」が一部の子音を除き文字にすることができるのである。達成感やおもしろさの点ではこの方が勝っていると思う。特に授業が週に 1、2 回という進度ではなおさらだろう。

趙義成 (2007) は、「母語である日本語を最大限に活用した教授法」「学習者の心理的負担を最小限に抑える教授法」を主題とし、日本語母語話者の学習者にとって「いわゆる「가나다順」は、辞書を引くときに役立ちこそすれ、発音を学ぶ際には必ずしも効果的な順序とはいえ

ない。母語である日本語の子音と照らし合わせながら学習しうる順序が、学習者にとって分かりやすい順序であると言えよう」とし、その順序のモデルとして次のような表を示している。

表 4-1 子音（初声）を学ぶ順序（趙義成（2007））

| 学習順序 | 子音の種類            | 摘要                 |
|------|------------------|--------------------|
| 1    | ㄱ, ㅋ, ㆁ, ㆁ, ㅇ    | 日本語と 1 対 1 で対応する子音 |
| 2    | ㄷ, ㅌ, ㅈ, ㅊ       | 日本語で有声／無声の対立がある子音  |
| 3    | ㄹ, ㄴ, ㄷ, ㄴ       | 激音                 |
| 4    | ㅁ, ㅂ, ㅅ, ㅆ, ㅈ, ㅊ | 濃音                 |

先に見た教科書 13 種のうち、この提出順になっているものは生越直樹・曹喜澈（2011）と金順玉（2015）の教科書であった。近似しているがㄱとㅇの扱いで表 4-1 の学習順序と異なるものが、河村光雅（2013）の教科書（ㅇが激音に）、梁貞模他（2005）と李潤玉他（2012）の教科書（ㄱが有声音化する平音とともに、ㅇが激音に）、熊谷明泰（2015）の教科書（ㄱが有声音化する平音とともに<sup>25</sup>、ㅇは激音のあとに別扱いで）である。子音を導入して初声と終声を同時に説明しようとする場合、ㄱ、ㅇはパッチムを表す字母にはなるが代表音の終声にはならないため最初に入れにくいと考えられる。ㅇは激音に含めるか、平音に含めるか、あるいはそのどちらでもないかという立場の違いによる。ㄱ、ㅇはその分類はともかく、有声／無声の対立がある子音に含まれないことは強調していい。つまり、サ行はあってもザ行はないこと。また、日本語母語話者はカナ表記のゆえにハ行とバ行が清濁の対立だと誤解しかねないが、バ行とハ行が対立することもこれで確認できる。

学習者への配慮という点では用語の使い方も問題になる。湯谷幸利（2007）は「終声」（音声）と「パッチム」（文字）も峻別すべしとする。つまり終声は 7 種類、パッチムは 27 種類あるという言い方になる。ただ、「音節の最後に来る子音を終声といいます。終声を表す字母をパッチムといいます。これは初声と同じ字母を使います」（李潤玉他（2012）の教科書）のような説明を見て、言語学の予備知識がない学習者にわかる用語は「子音」だけだろう。用語を多く使えば説明の文は正確で簡潔になるかもしれないが、それを理解するための説明の文章が別に必要になる。学習者の負担を減らすには、なるべく用語を減らし容易に理解しやすくかつ記憶しやすくする必要がある。例えば、木内明（2013）の教科書では、「終声」という用語は使わずに「パッチムにはいろいろな形がありますが、発音は次の 7 つに集約されます」と説明する。この程度の説明が簡単でわかりやすく、かつ覚えやすいだろう。

25 平音をまず有声音の鼻音と流音、そしてその他の平音と分けて導入しているため。

## 5. 反切表の功罪

### 5.1 反切表の種類

反切表あるいは가나다라表（カナダラ表、가갸표とも）は、子音（初声）と母音（中声）の組み合わせの一覧表で、パッチムは含まれない。ほとんどの韓国語教科書にも掲載されており、次のような種類がある（表 5-1）。今回見た教科書 23 種のうち単母音 8 個型の教科書の 1 種<sup>26</sup>を除き、単母音 8 個型を含むその他すべてに反切表が掲載されていた。

表 5-1 韓国語教科書に掲載されている反切表の種類

|   | 列（母音）横                      | 行（子音）縦         | 22 種中 |
|---|-----------------------------|----------------|-------|
| A | ㅏㅑㅓㅕㅗㅛㅜㅝㅟㅡ 10 個             | 濃音を除く子音字母 14 個 | 12    |
| B | 上記基本母音字母 10 個               | 濃音を含む子音字母 19 個 | 5     |
| C | 上記基本母音字母 10 個 + 合成母音字母 11 個 | 濃音を含む子音字母 19 個 | 5     |

\* さらにそれぞれに、読みの示し方に次の 3 タイプがある。

- ① すべての組み合わせに読み方をカタカナ・発音記号で併記。
- ② 子音字母と母音字母にのみ発音を併記し、各組み合わせには併記なし。
- ③ 発音の併記いっさいなし。

\* 注記等がある。

- ・実際に使われない文字は空欄にする。
- ・あまり使われない文字は網掛け等で示す。
- ・使用するかどうかに関係なくすべて上げ、「実際には使われない文字もある」と注がある。
- ・「すべての組み合わせを網羅しているわけではない」と注がある。

反切表は、韓国語母語話者の子どもが読み書きを学習するための教材である。ハングルを「ㄱㅇㅏㅑㅓㅕㅗㅛㅜㅝㅟㅡ」のようにばらし書きせずに「한글」と束ね書きすることによって、どのように音を綴るか示す必要が生じた<sup>27</sup>。つまり、反切表は非母語話者の学習者のためのものではなく、母語話者がすでに知っている音声をどう綴ればいいのかを学ぶための教材である。音声を知らない非母語話者の学習者のための教材としてこれを使用するには当然なんらかの配慮が必要であろう。母語話者用は表 5-1 の A のタイプが一般的なようである。非母語話者用の教科書も A のタイプが多く、B、C もあった。A のタイプのうち 2 種は 10 個の「基本母音字母」に「ㅏ」「ㅑ」の 2 列を加えたものであった<sup>28</sup>。基本母音字母 10 個の A、B のタイプを合わせると、「合成母音字母」も加える C のタイプの約 3 倍あった。また「子音字母」の配列は、濃音を加えるか加えないかで分かれるが、加える場合は最後に付け加える「ㄱ、ㅋ、ㆁ、ㄷ、ㄹ、ㄴ、ㄷㄹ、ㄴㄷ、ㄴㄹ、ㄴㄴ」 という順が一般的のようであ

26 熊谷明泰（2015）の教科書。各子音を導入するたびに、基本母音字母 10 個と合成母音字母 11 個、計 21 個の母音と組み合わせて、가갸거겨…귀긔のように発音させる練習はある。

27 朴永濬他（2007）、宋喆儀（2009）参照。

28 例えば金順玉・阪堂千津子『最新チャレンジ！韓国語』（白水社 2014）では「基本母音字母」（ㅏㅑㅓㅕㅗㅛㅜㅝㅟㅡ 10 個）と「基本子音字母」（濃音を除く 14 個）を導入した後、가나다라表を掲げ、「発音しながらぞってみましょう」として、灰色で印刷された表の文字をなぞり書きする練習がある。巻末にはこれにㅏㅑの 2 列を加え、発音記号とカタカナで読みを示した表を載せている。表の下に「すべての組み合わせを網羅しているわけではありません」と注意書きがある。

る<sup>29</sup>。子音字と母音字の組み合わせ個々の読みを発音記号やカタカナですべて示しているのは22 種中3 種<sup>30</sup> だけだった。

今回は、日本で開発され発行された教科書のみを見たが、3種だけ韓国で開発されたもので「反切表」がどうなっているかを見ておく。この3種に限っては積極的に反切表を利用しているようには見えない。

- ・慶熙大学国際教育院『日本人のための韓国語ナビ 1 初級』国書刊行会 2009

A、B、C タイプの反切表はない。かわりに、子音と母音の組み合わせを書く練習には、濃音を含む 19 の子音と「標準語規定」で単母音とされる 10 個の母音「ㄷ ㄱ ㄴ ㄷ- ㅂ ㅅ ㅈ ㅊ」がある。

- ・カナタ韓国語学院 『가나다 Korean for Japanese 初級 1 (改訂版)』 Language Plus 2006

「글자의 짜임 (子・母音字の組合わせ)」として A のタイプの表

- 서강대학교 한국어교육원 『서강 New 한국거 1 A Student's book』 2013

(西江大学校韓国語教育院 『西江 New 韓国語 1 A Student's book』)

(反切表にあたる表はなく、母音と子音を次のように分けて導入)

한글 1    ㅏ   ㅑ   ㅓ   ㅕ   ㅗ   ㅛ   ㅜ   ㅠ   ㅡ   ㅣ   ,   ㄴ   ㄹ   ㅁ   ㄷ   ㄹ   ㅅ   ㅈ   ㅊ   ㅋ   ㆁ   ㄷ   ㄷ   ㅅ   ㅈ   ㅊ   ㅋ   ㆁ

한글 2 ㅏ ㅑ ㅓ ㅕ ㅗ, ㅛ ㅜ ㅞ ㅟ, ㅟ ㅠ ㅡ ㅢ의 patches

한글 3 개 내 제, 코트표스호, 70日入スのパッチム

한글 4    ㅂ   ㅋ   ㆁ   ㄱ   ㆅ   ,   ㄷ   ㅌ   ㅍ   ㅈ   ㅊ   ㅑ   ㅓ   ㅕ   ㅗ   ㅛ   ㅜ   ㅠ   ㅡ   ㅣ

## 5.2 反切表を使用する場合の問題点

非母語話者の学習者、特に独習者の中には“半切表を覚えなければならない”、あるいは“これを覚えれば韓国語が読めるようになる”と思い、ひたすら表を唱えたり覚えようとしたりする人がいるが<sup>31</sup>、これは大きな誤解である。子音字と母音字の組み合わせ方により字形が異なることを確認したり、行によっては同じ発音のものがあること（ㅏ、ㅑの行のㅏとㅑ、ㅓとㅕ、ㅗとㅛ、ㅜとㅠ）を確認したりする場合や、子音と母音を組み合わせて調音方法を確認しながら発音する練習などには役に立つだろうが、反切表そのものを覚える必要はない<sup>32</sup>。そんなこと

29 野間秀樹他(2010)の教科書は、「ㄅ、ㄆ、ㄌ、ㄋ、ㄊ、ㄍ、ㄎ、ㄏ、ㄓ、ㄔ、ㄕ、ㄖ、ㄗ、ㄘ、ㄙ、ㄨ、ㄩ、ㄣ」のように、辞書の見出し語の配列になっていた。

30 李昌圭 (2012) ; 発音記号、河村光雅 (2013) ; 発音記号とカタカナ、金順玉他 (2014) ; 発音記号とカタカナの両方。

31 インターネット上の質問を書き込むサイトにはこのような質問が見受けられる。

32 辞書を引くのに見出し語の順を覚えるため必要としているものもあるが、入門期に辞書を使うことはまずないし、“紙の辞書”があまり使われなくなった今、必ずしもこれがなければ学習が進められないというものでもない。

にかける時間と労力は単語や文の表記と発音を覚えることに使うべきである。

もう一つの問題は、すべての組み合わせが反切表に載っているわけではないことである。学習者の多くが読みに自信の持てない文字を反切表から探して音を確認めているようである。したがって、すべての組み合わせの発音を併記していなければ反切表を載せる意味があまりない。読みが予測しにくい組み合わせもあるからである。例えば、시は [si] ではなく [ʃi] で、一方, ㅅㅅは [tʃi] ではなく [ti] である。口蓋化した音のㅍ, ㅌの行のㅍとㅌ, ㅅとㅆ, ㅈとㅊは同じ音になることも子音の導入時に説明のない教科書もある。金順玉他（2014）の教科書では巻末付録に掲載した「カナダラ表」のすべての組み合わせに発音記号とカタカナ表記の両方を併記している。ハンゲルの読みのカタカナ表記は不正確であるとして排しようとする向きもあるが、英語が苦手な発音記号もわからない学習者の場合、カタカナしか頼るものがない。発音記号が苦手でも、カタカナと併記してあれば、カタカナで同じ音でも発音記号が違えば音が違うということが確認でき、授業で説明されたことを思い出せるだろう。また、二重母音と子音の組み合わせも文字が複雑になって、読みづらく、「꺾」「꺾」など発音に注意すべきものもある。反切表を載せるなら、よく使う二重母音の列もほしい。かつ現在使われない文字は空欄にしたものもいい。学習者が自習する際、教科書に掲載された反切表をどのように使うかも考えるべきである。

反切表の教科書への掲載位置は、見返し、本文の途中、巻末付録の3つの種類がある。これも教科書執筆者の意図をある程度示すものと考えられる。本文の途中に反切表を置くものはいいて「基本母音字」10個と濃音を含まない子音字14個の表であるAのタイプで、これらの母音字と子音字を導入したあとにまとめと練習をかねていることが多い。見返しに載せるものは、つねに参照できるようにとのことかも知れないが、すべての組み合わせについて発音を書いていなければあまり意味がないだろう。ある教科書は見返しの見開き2頁を使ってCのタイプの反切表が個々の組み合わせの発音なしで掲載されている。数の多さに圧倒されるだけだし、「꺾」のような複雑な字を見るとこんなものが読めるかと思ってしまうのではないか。Cのタイプを採用する教科書の中には、「基本母音字母」と「合成母音字母」を2つの表に分けているものもあり、この方が圧迫感は少ない。巻末付録に置くものは反切表を積極的に利用することを意図していないものと受け取れる。教科書の後ろまで丹念に見ない学習者は見落とす可能性がある。

日本語母語話者の学習者が反切表の使い方を誤解するのは、日本語の五十音表に類似したものだと思ひ込むせいかもしれない。一般に日本人がイメージする五十音表（図5-1）にも濁音、半濁音、拗音、促音「っ」などは含まれないのだが、すべての字母が含まれるので音も網羅していると思いがちである。これを子どものころ読み書きの学習に使用し、慣れ親しんでいる日本人に反切表を示すときはそのようなことも念頭に置き注意する必要があるだろう。

### 5.3 五十音表——日本語母語話者用と日本語教育用

その言語の第二言語教育の歴史が浅く、研究や教材の開発が進まぬうちは母語話者用のものを使うということが多く行われてきた。ここでは日本語の第一言語教育と第二言語教育においていわゆる「五十音表」がどう扱われるかを比較する。



図 5-1 幼児の学習素材館 <http://happyilac.net>

図 5-1 は日本語母語話者の子ども用の教材である。すでに知っている音の文字を覚えるのが目的であるから、濁点をつけるだけの濁音と半濁音、拗音は含まれない。縦書きが普通である。

日本語教育でも、ひらがなの導入をするとき五十音表（横書き）を使うのが一般的である。図 5-2 は『みんなの日本語初級 I』<sup>33</sup> の『文法解説』書の方に掲載されているものである。すべての文字にヘボン式ローマ字で読み方が示され、日本語の音韻システムとその表記についての解説がある。「五十音表」を含め、他に濁音・半濁音、拗音、そしてカタカナ語特有の音節とその表記<sup>34</sup>の 4 つの表に分かれている。これらの表により、母音の種類と子音の種類がわかる。この教科書の『本冊』の方に掲載されている「日本語の発音」の頁にはローマ字の読みや解説は一切なく、ひらがなの一覧とカタカナの一覧で頁を分けている。

一般的な授業ではまず表を見せて覚えるべき文字（ひらがな）が 46 個あることを示す。同時に「あいうえお」で母音が 5 つあることを示し、か行からわ行まで直音の清音（いわゆる「五十音」）を一通り導入する。1 行ずつ発音、書き方、それらの文字を使った単語の提示と練習を行う。そのあと濁音、半濁音を提示し、さらに撥音「ん」、促音「っ」、長音、そして拗音を提示する<sup>35</sup>。

33 『みんなの日本語』は日本国内の日本語教育現場で幅広く使われている教科書の 1 つである。教科書本冊と各国語版の『文法解説』に分かれている。本冊は日本語のみになっている。

34 図 5-2 の「外来語」の音を表すためのこれらの表記は、「外来語の表記」（1991 年内閣告示）の第 1 表（右欄）と第 2 表に示されているものの一部である。この告示は慣用を重視したもので、たとえばフィリピン、フィリピンなどどちらも認められることになる。

35 国際日本語研修協会（1999）参照。

# INTRODUCTION

## I . Japanese Pronunciation

### 1. Kana and Mora

Japanese can be written phonetically in kana as shown below.

A 'mora' is a unit of sound equivalent in length to one Japanese kana (or two of the contracted sounds called yo-on, which are written with small kana).

The Japanese language is based on five vowel sounds: あ (a), い (i), う (u), え (e) and お (o), which are used alone or attached to either a consonant (e.g. k + a = か) or to a consonant plus the semi-vowel 'y' (e.g. k + y + a = きゃ) (the only exception being a special mora, ん, which is not followed by a vowel). All of these sounds are or more or less equal in length when spoken.

|            | あ-column  | い-column     | う-column     | え-column     | お-column  |
|------------|-----------|--------------|--------------|--------------|-----------|
| あ-row      | あ ア<br>a  | い イ<br>i     | う ウ<br>u     | え エ<br>e     | お オ<br>o  |
| か-row<br>k | か カ<br>ka | き キ<br>ki    | く ク<br>ku    | け ケ<br>ke    | こ コ<br>ko |
| さ-row<br>s | さ サ<br>sa | し シ<br>shi   | す ス<br>su    | せ セ<br>se    | そ ソ<br>so |
| た-row<br>t | た タ<br>ta | ち チ<br>chi   | つ ツ<br>tsu   | て テ<br>te    | と ト<br>to |
| な-row<br>n | な ナ<br>na | に ニ<br>ni    | ぬ ヌ<br>nu    | ね ネ<br>ne    | の ノ<br>no |
| は-row<br>h | は ハ<br>ha | ひ ヒ<br>hi    | ふ フ<br>fu    | へ ヘ<br>he    | ほ ホ<br>ho |
| ま-row<br>m | ま マ<br>ma | み ミ<br>mi    | む ム<br>mu    | め メ<br>me    | も モ<br>mo |
| や-row<br>y | や ヤ<br>ya | (い イ)<br>(i) | ゆ ユ<br>yu    | (え エ)<br>(e) | よ ヨ<br>yo |
| ら-row<br>r | ら ラ<br>ra | り リ<br>ri    | る ル<br>ru    | れ レ<br>re    | ろ ロ<br>ro |
| わ-row<br>w | わ ワ<br>wa | (い イ)<br>(i) | (う ウ)<br>(u) | (え エ)<br>(e) | を ヲ<br>o  |
|            | ん<br>n    |              |              |              |           |

e.g.,  

 hiragana  
 katakana  
 romaji

|              |              |              |
|--------------|--------------|--------------|
| きゃ キャ<br>kya | きゅ キュ<br>kyu | きょ キョ<br>kyo |
| しゃ シャ<br>sha | しゅ シュ<br>shu | しょ ショ<br>sho |
| ちゃ チャ<br>cha | ちゅ チュ<br>chu | ちょ チョ<br>cho |
| にゃ ニャ<br>nya | にゅ ニュ<br>nyu | にょ ニョ<br>nyo |
| ひゃ ヒャ<br>hya | ひゅ ヒュ<br>hyu | ひょ ヒョ<br>hyo |
| みゃ ミャ<br>mya | みゅ ミュ<br>myu | みょ ミョ<br>myo |

|              |              |              |
|--------------|--------------|--------------|
| りゃ リャ<br>rya | りゅ リュ<br>ryu | りょ リョ<br>ryo |
|--------------|--------------|--------------|

|            |           |           |           |           |           |
|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| が-row<br>g | が ガ<br>ga | ぎ ギ<br>gi | ぐ グ<br>gu | げ ゲ<br>ge | ご ゴ<br>go |
| ざ-row<br>z | ざ ザ<br>za | じ ジ<br>ji | ず ズ<br>zu | ぜ ゼ<br>ze | ぞ ソ<br>zo |
| だ-row<br>d | だ ダ<br>da | ぢ チ<br>ji | づ ツ<br>zu | で デ<br>de | ど ド<br>do |
| ば-row<br>b | ば バ<br>ba | び ビ<br>bi | ぶ ブ<br>bu | べ ベ<br>be | ぼ ボ<br>bo |
| ぱ-row<br>p | ぱ パ<br>pa | ぴ ピ<br>pi | ぷ プ<br>pu | ぺ ペ<br>pe | ぽ ポ<br>po |

|              |              |              |
|--------------|--------------|--------------|
| ぎゃ ギャ<br>gya | ぎゅ ギュ<br>gyu | ぎょ ギョ<br>gyo |
| じゃ ジャ<br>ja  | じゅ ジュ<br>ju  | じょ ジョ<br>jo  |

|              |              |              |
|--------------|--------------|--------------|
| びゃ ビャ<br>bya | びゅ ビュ<br>byu | びょ ビョ<br>byo |
| ぴゃ ピャ<br>pya | ぴゅ ピュ<br>pyu | ぴょ ピョ<br>pyo |

The katakana letters in the square on the right are not in the above table. They are used to write sounds which are not original Japanese sounds but are needed for use in loanwords.

|        |        |        |
|--------|--------|--------|
| ウィ wi  | ウェ we  | ウォ wo  |
| ツァ tsa | シェ she | ツェ tse |
| ティ ti  | トウ tu  | ツォ tso |
| ファ fa  | フィ fi  | フェ fe  |
| ディ di  | ドゥ du  | フェ fe  |
|        | デュ dyu | ジョ je  |
|        |        | フォ fo  |

図 5-2 『みんなの日本語 初級 I 第 2 版 翻訳・文法解説 英語版』スリーエーネットワーク 2012

また、五十音表は文字や発音の導入だけでなく、図 5-3 のようにそのまま五段活用動詞の活用表にもなるため、入門期のはじめに覚えておいて無駄ではない。つまり、辞書の見出し語の提出順だからという程度のものではない。

|     | W | R | Y | M | P | B | H | N | D | T | Z | S | G | K |   |
|-----|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ない  | わ | ら | や | ま | ば | ば | は | な | た | た | ざ | さ | か | あ | A |
|     | ワ | ラ | ヤ | マ | バ | バ | ハ | ナ | ダ | ダ | ザ | サ | カ | ア |   |
| い・ま | い | り | み | び | び | び | に | ち | ち | ち | じ | し | ぎ | い | I |
|     | イ | リ | ミ | ビ | ビ | ビ | ニ | チ | チ | チ | ジ | シ | ギ | イ |   |
|     | う | る | ゆ | む | ぶ | ぶ | ぬ | つ | つ | つ | ず | す | く | う | U |
|     | ウ | ル | ユ | ム | ブ | ブ | ヌ | ツ | ツ | ツ | ズ | ス | ク | ウ |   |
| ば   | え | れ |   | め | べ | べ | へ | ね | て | て | ぜ | せ | げ | け | E |
| え・ま | エ | レ |   | メ | ベ | ベ | ヘ | ネ | デ | デ | ゼ | セ | ゲ | ケ |   |
| う   | を | ろ | よ | も | ぼ | ぼ | ほ | の | ど | と | そ | そ | こ | お | O |
|     | ヲ | ロ | ヨ | モ | ボ | ボ | ホ | ノ | ド | ト | ソ | ソ | コ | オ |   |
|     | つ |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | ん |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | で |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | い |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | な |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     | て |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|     |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

図 5-3 「五十音図表」 凡人社

6. 韓国語教科書の「文字と発音」で使用される発音記号とカタカナ表記

## 6.1 発音記号の使用と発音の指導

韓国語教科書で主に大学や語学教室など教室で教師が説明しながら使うことを想定したものは、独習用の教科書とは異なり、はじめの「文字と発音」の解説部分では発音記号が使われるが、それ以降はハングルのみが普通のものである<sup>36</sup>。これはできるだけ早く正確な発音を身につけ、ハングルで読み書きできるように指導するためであると考えられる。しかし、最初の「文字と発音」を終わった時点で完璧にハングルを覚えている学習者はまれであるので、その後の授業でも本文会話や例文、新出単語などの発音を板書で示すのに学習者が理解できる発音記号があると便利である。また、当然授業外の予習復習で自習をする際にも有用である。自習するときは教科書添付の CD を聞いて発音を確かめるようにと指示すると、「CD を聞いても早すぎて聞き取れないし、音が全部くっついて聞こえるからわからない」と訴える学習者がいる。CD の音声は文全体の抑揚をつかむには効果的で繰り返し聞いてほしいものであるが、確かにハングル 1 文字ずつの発音はわかりにくい<sup>37</sup>。その意味で、発音をなるべく正確で、かつ

36 曾我祐典他（2006）の教科書は文字と発音の説明はすべて挟み込みの別冊小冊子に入れ、本冊は1課から本文会話が始まる。全19課のうち6課までは本文会話と文型の例文、一部の練習問題のすべてにカタカナで読みが振られている。また、ブルチョウ・吉岡美愛他（2012）の教科書でも全16課のうち、はじめの6課までが文字と発音、7課から会話が始まり、9課まではすべての本文会話と新出語彙に発音記号が振られている。このように本文にまで読みを付している教科書は今回見た中ではこの2冊だけだった。

37 韓国の文化体育観光部と KBS 韓国語研究事業チーム、国立国語院が共同して制作し、KBS World が放映している番組『드근 드근 한국어 (ドキドキ韓国語)』では、アナウンサーが単語や文を自然なスピードで読む前に1字ずつ区切って読んでいる。学習者にはわかりやすいだろう。

わかりやすく、そして覚える負担の少ない表記方式を使い、学習者にも覚えさせた方がいいだろう。例えば、崔柄珠（2014）の教科書では「文字と発音」部分の単語を書く練習でハングルとともに発音記号を記入させるようになっている。

「文字と発音」の解説部分で使用される発音記号は、次のような記号が一般的である。

|    |                |                |                |                |    |     |      |    |      |    |
|----|----------------|----------------|----------------|----------------|----|-----|------|----|------|----|
| 母音 | ㅏ              | ㅑ              | ㅓ              | ㅕ              | ㅗ  | ㅛ   | ㅜ    | ㅠ  | ㅡ    | ㅣ  |
|    | a              | ja             | o              | jo             | o  | jo  | u    | ju | u    | i  |
|    | ㅗ              | ㅛ              | ㅓ              | ㅕ              | ㅗ  | ㅛ   | ㅜ    | ㅠ  | ㅜ    | ㅠ  |
|    | ε              | jε             | e              | je             | wa | wε  | we   | wɔ | we   | wi |
|    |                |                |                |                |    |     |      |    |      |    |
| 子音 | ㄱ              | ㄴ              | ㄷ              | ㄹ              | ㄱ  | ㅍ   | ㅅ    | ㅇ  | ㅈ    | ㅊ  |
|    | k/g            | n              | t/d            | r, l           | m  | p/b | s, ʃ | 無音 | ʃ/dʒ |    |
|    | ㅌ              | ㄴ              | ㄷ              | ㄹ              | ㄱ  | ㅍ   | ㅅ    | ㅇ  | ㅈ    | ㅊ  |
|    | g <sup>h</sup> | k <sup>h</sup> | t <sup>h</sup> | p <sup>h</sup> | h  | ʔk  | ʔt   | ʔp | ʔs   | ʔʃ |
|    |                |                |                |                |    | kʔ  | tʔ   | pʔ | sʔ   | ʃʔ |
| 終声 | -m             | -n             | -ŋ             | -l             | -p | -t  | -k   |    |      |    |

上記の方式以外のものには次のようなものがある。

- ・ㅓを [ɔ] ではなく [ʌ]<sup>38</sup>
- ・ㅗを [ε] ではなく [æ]<sup>39</sup>
- ・半母音 [j] を [y] で表す<sup>40</sup>。
- ・激音の [h] を上付き文字にせず [h] を使う<sup>41</sup>。 ex. 카[k<sup>h</sup>a] →/kha/
- ・濃音は符号 [ʔ] を使用せずローマ字を重ねる<sup>42</sup>。  
ㄱ/kk/, ㅌ/tt/, ㅍ/pp/, ㅅ/ss/, ㅈ/cch/
- ・終声の ㅍ ㅌ ㅊ を上付き文字にしない<sup>43</sup>。 ex. 밥[pap<sup>p</sup>] →[pap]
- ・終声を符号 [ʔ] で表す<sup>44</sup>。 ex. 밥[papʔ]

38 熊谷明泰（2015）、金智賢（2015）の教科書。この発音記号については脚注 8 参照。

39, 40 プルチョウ・吉岡美愛他（2012）の教科書。

41, 42 河村光雅（2013）の教科書。

43 河村光雅（2013）、光化門韓国語スタジオ（2010）、崔柄珠（2014）、梁貞模他（2005）、プルチョウ・吉岡美愛他（2012）の教科書など。

44 金智賢（2015）、熊谷明泰（2015）の教科書など。

発音記号は、字母の導入のところで補助的に示すのみの消極的な使用<sup>45</sup>と、例や練習の単語にも用いる積極的な使用<sup>46</sup>、そして練習問題の単語には使用しないが発音規則の説明のための単語例には使用する中間的なもの<sup>47</sup>がある。

また、発音記号ではなく韓国語のローマ字表記法によるものもまれにある。例えば、金榮愛(2015)の教科書は、パッチムに4頁、発音変化規則の説明に9頁使うなど、発音の説明に重点をおいているが、次のような表記を「発音を示す」としてハングルの字母に併記している。ただし、この表記の使用は上に述べた消極的使用で、説明文の中ではカタカナを使用している。

|    |      |     |      |      |    |      |    |    |       |    |    |
|----|------|-----|------|------|----|------|----|----|-------|----|----|
| 母音 | ㅏ    | ㅑ   | ㅓ    | ㅕ    | ㅗ  | ㅛ    | ㅜ  | ㅠ  | ㅡ     | ㅣ  |    |
|    | a    | ya  | eo   | yeo  | o  | yo   | u  | yu | eu    | i  |    |
|    | ㅐ    | ㅒ   | ㅖ    | ㅙ    | ㅗ  | ㅛ    | ㅜ  | ㅠ  | ㅞ     | ㅟ  | ㅢ  |
|    | ae   | yae | e    | ye   | wa | wae  | oe | wo | we    | wi | ui |
| 子音 | ㄱ    | ㄴ   | ㄷ    | ㄹ    | ㄱ  | ㄴ    | ㄷ  | ㄹ  | ㅈ     | ㅊ  |    |
|    | g, k | n   | d, t | l, r | m  | b, p | s  | -  | j, ch |    |    |
|    | ㅌ    | ㅍ   | ㅍ    | ㅍ    | ㅍ  |      | ㅍ  | ㅍ  | ㅍ     | ㅍ  | ㅍ  |
|    | ch   | k   | t    | p    | h  |      | kk | tt | pp    | ss | jj |
| 終声 | m    | n   | ng   | l    | p  | t    | k  |    |       |    |    |

これは韓国の文化観光部が2000年に公布した韓国語のローマ字表記法<sup>48</sup>をそのまま採用したもので、韓国に行くと道路標識などで見かける。これは学術論文などでハングルの綴りをそのままローマ字に転写するローマ字表記であるYale式や福井式とは異なり、あくまで発音を記すことを目的に「ローマ字以外の符号はできるだけ使用しない」という原則で考案されている。濃音を[ʔ]ではなく同じ子音を重ねる表記とすることや半母音[j]をyで表記することなどは発音記号が苦手な学習者にはなじみやすいかも知れないが、ローマ字1字で表せない単母音がㅓ eo、ㅐ ae、ㅡ euのように2文字で表記されるところや、p、t、kの終声が小書きにされていないところなどはかえって読みにくく、このローマ字の読み方を覚えるのが負担となるだろう。また、有声音化する平音ㄱ、ㄴ、ㄷ、ㅌをg、d、b、jで表し、k、t、p、chを激音ㅋ、ㅌ、ㅍ、ㅊに用いているが、これは韓国語母語話者がㄱ、ㄴ、ㄷ、ㅌの有声／無声の区別が弁別的ではなく違いが認識できず、語頭と語中で書き分けることが困難なため、このように

45 河村光雅(2013)、入佐信宏他(2002)ほかほとんどの教科書。

46 プルチョウ・吉岡美愛他(2012)、野間秀樹他(2010)、高秀賢(2006)の教科書など。

47 李潤玉他(2012)は発音変化の説明で一部の語例に発音記号を使用する。

48 韓国語のローマ字表記法の歴史的変遷と各方式の比較については金珍娥(2007)参照。

なったのであって、この方式を、どうしても清濁違う音に聞こえる日本語母語話者の学習者に使うのは無理があるだろう。

上記の金榮愛（2015）の教科書では、「ㄱ (g, k)、ㄷ (d, t)、ㅂ (b, p)、ㅈ (j, ch)」と示し、「韓国語は、語頭がはっきりと発音されるため、初声の子音が濁音になることはありません。つまり、ㄱ (g)、ㄷ (d)、ㅂ (b)、ㅈ (j) は、語頭にくるときは、ㅋ (k)、ㅌ (t)、ㅍ (p)、ㅊ (ch) よりは弱いですが、これに似た発音になります。そのため、日本人には、ㅋ (k)、ㅌ (t)、ㅍ (p)、ㅊ (ch) に聞こえてしまいます」と説明し、音の違いを次のように示している。

濁音に近くなる ← 가<가<카<카 → 激音に近くなる

日本語母語話者には濁音より清音の方が“軽い、明るい”感じはしても「はっきり」しているという感じはしにくいだろう。そもそもどちらも清音に聞こえる가と카は、日本語母語話者にはミニマルペアで示されない限り区別が難しいので、「激音で始まる単語は第1音節と第2音節を同じ高さで高く発音する」というように、ピッチ（音の高低）の違いを意識させて発音練習した方がはるかに効果的だろう<sup>49</sup>。

上記の金榮愛（2015）の説明のように“濁音が語頭では清音になる”というような説明は日本語母語話者にはかなり違和感があると思うが、金泰虎（2000）ではその方式で効果を上げたような実験授業の結果を報告している。この報告では、入門期の文字と発音導入において母音や子音の発音表記をカタカナ、国際音声記号、英語式の発音記号で表す場合の問題点をあげ、発音の習得により効果のあるものとして英語発音記号を一部修正したものを提案している。国際音声記号によるものは、平音の가は語頭で [ka]、語中では [ga]、激音の카は [kʰa] となる。これを修正した方式では平音가は語頭でも語中でもすべて [ga] で表し、激音を [ka] で表す。文化観光部 2000 年式によるものである。そして、この方式で教えたクラスの方が、[ka/kʰa] を使って教えたクラスより発音の正読率、書き取りの正答率ともによかったという。被験者が実際にどう認識し、どんな発音をしていたかわからないが、激音を [kʰa] で表しても十分な帯気音で発音できないのかもしれない。

## 6.2 カタカナ表記の使用と発音の指導

外国語学習が好きで学校英語でも単語の読みを辞書で調べて発音記号でメモしていたような

49 長渡陽一（2009）は、韓国語母語話者を対象にした発音の聞き取り実験で、わざと高く発音した平音を9割以上が激音か濃音に聞き取り、逆にわざと低く発音した激音を8割の人が平音に聞き取ったという実験結果を紹介している。ピッチとイントネーションについて詳しく解説し、積極的に練習に取り入れている教科書は野間秀樹他（2010）の教科書。

学習者の場合、発音記号を使用することに抵抗はなく、効果的だろう。しかし、英語が苦手な英語の教科書に読み方をカタカナで書き込んでいたような学習者には発音記号を覚えることは新たな負担になるのでカタカナで読みを書くことに妥協せざるを得ないだろう。カタカナを使用するということは、日本語母語話者の耳に聞こえたとおりの表記が原則になるので、次の3点をどう書くかが問題になる。

- ・終声（連音化しない場合）ㄱ、ㄴ、ㄷ、ㄹ、ㅁ、ㅂ、ㅇ
- ・平音（無声音）、濃音、激音の区別 (ex. 가、카、까)
- ・母音「オ」ㅏ、ㅑおよび「ウ」ㅜ、ㅡの区別

終声はカタカナを小書きにする、ローマ字を使う (ex. 한글ハングル、ハ n グ l) といった方法が見られる。カタカナを用いる場合、「ㄷ→ク、ㄴ→ン、ㄷ→ツ、ㄹ→ル、ㄴ→ム、ㄹ→プ、ㅇ→ン」(ンは小書きにしない) のように書くのが一般的なようである。平音(無声音)、濃音、激音については、平音と激音は区別せず「カ」と書き<sup>50</sup>、濃音は「ツカ」のように小さいツを頭につける方法がある。

母音に関してはカタカナだけでは区別ができない。そもそも韓国語の「オ」に聞こえる２種類の母音は対比させて聞かせれば区別はできるが、はじめて聞く単語の中に含まれている場合、音だけでどちらなのか特定するのは上級レベルの学習者でもむずかしい。この区別の習得を初学者に期待すべきではないだろう。しかし、曖昧に発音すると韓国人には通じない恐れがあるので、単語ごとにハングルの綴りで覚え、口の形を意識して発音する必要がある。たとえば、일번（１番）と일본（日本）は初学者は綴りを混同しやすいが、学習が進むにつれ、次第に誤りはなくなる。個人差はあるだろうが、発音を覚えたと言うより、綴りを覚えたというべきかも知れない。「ウ」も同様である。

熊谷明泰（2007）は、発音表記にカタカナを用いる 4 種の韓国語辞典での表記法を比較検討しているが、「原語の発音をよりよく反映させるためには発音記号を用いることが望まれるが、カナによる発音表記は厳密性を犠牲にしつつも、発音記号の難解さを補完しうるものとなる。この場合、利用者に負担感を抱かせないために、日本語におけるカナ使用の慣行からできるだけ逸脱しないようにする必要がある」とし、例えば「한글ハングル」のように終声を小書きにするものや、濃音を「ㅈ」を「ツカ」のように小さいツを頭につけるのは「慣行から逸脱した」奇異な表記法と批判している。「학교（学校）」[ha<sup>h</sup>ˈkjo] のように終声と次の音節の初声

50 兼若逸之(2007)の教科書は激音を区別してひらがなを用い「カ」、カ「か」、外「カ」と表記し、終声はローマ字も使用して、 $\text{h} \rightarrow \text{p}$ 、 $\text{c} \rightarrow \text{t}$ 、 $\text{f} \rightarrow \text{k}$ 、 $\text{r} \rightarrow \text{m}$ 、 $\text{l} \rightarrow \text{n}$ 、 $\text{o} \rightarrow \text{ん}$ とする。高島淑郎(2002)は激音をひらがな、長母音を「ー」で表す。「사투리(方言)」は「サーと우리」となる。

に同じ音が続く場合は日本語の促音のように発音して問題ないので「ハッキョ」と書き、「ハクッキョ」などと書く必要はない。問題は違う音が続く場合で、確かに「숟가락 (スプーン)」を「スツッカラク」などと書くと終声 [t] と濃音を表す小さいツが二重になってわかりにくい。また語頭に濃音が来る「까치 (かささぎ)」[ˈkaʃi] を「ツカチ」とするのも奇異ではある。しかし、「고맙습니다 (ありがとうございます)」を「コマッスムニダ」とすると唇を閉じないので発音が不自然にくずれた感じになってしまう。

韓国語は連音化や有声音化をはじめ同化現象による発音変化が多く、綴りの通りには読めない。初学者には発音記号（読み仮名）が必要である。ほとんどの教科書では、新出語彙に発音変化を含む場合、発音記号ではなくハングルを使って「숟다[조타]」のように示している。ハングルの読みに自信のない学習者にはつらいところである。

カタカナ表記で誤った発音が定着するのは避けたいが、はじめから正確な発音を強要することは学習意欲をそぐことになる。また、人数が多いクラスの場合、授業中指名されたときにすら読めないと恥ずかしいとか他の学習者の足を引っ張って迷惑をかけるのがいやだといった理由でカタカナを振るという学習者もいる。そのような学習者心理にも配慮する必要がある。しかし、自転車の補助輪と同様で、なるべく早くカタカナの振り仮名を“卒業”しなければならないと学習者自身が自覚し、もどかしさに対する忍耐を持つことが何より必要である。そして、授業では教師はもちろん他のクラスメートも“たどたどしさ”を暖かく見守る雰囲気してほしい。自宅学習では、文字を見ずにモデルをまねて発音する練習を繰り返し、音で覚えたらハングルで書いてみるという練習が効果的であることも学習者に自覚させ、復習に取り入れるよう指導するのがいいだろう。

## 7. 日本語教育における文字指導

日本語教育でも入門期の学習者にとっていかに早くひらがなが読めるようになるかが課題になる。ほとんどの日本語の教科書は第1課からひらがな表記で、本文会話と文型の導入がすぐに始まっており、ひらがなが読めなければ教科書を使うこともできないからである。もちろん授業中は口頭でのやりとりだけで進めることもできるが、自宅での復習にはやはり文字が必要になる。韓国語の入門教科書のほとんどが全体の4分の1ほどを文字と発音の指導にあてているのとは大きな違いがある。

日本語教育では、一般にまず入門の教科書に入る前にひらがなとカタカナを一通り導入する。ひらがなはすべて読み書きできるようにし、カタカナは一通り読めるようにすると定め、自分の名前や出身地のみカタカナで書けるようにする。他のカタカナは、そのあと、課を進めながら平行して（分けて、あるいは出てきた単語ごとに）教える。漢字は、日本語学習に慣れてきたら簡単な漢字やよく使う漢字を少しずつ導入していく方法をとる。

学習者やコースにより文字の指導はさまざまであるが、例えば、大学の留学生対象の半年の日本語コースの場合、はじめの1週間（90分5コマ程度）で文字と発音の指導を徹底して行い、ひらがなを読めるよう集中させるという方法もとられる<sup>51</sup>。授業では音韻体系の説明もし、ひらがなの字形の説明、読み方、書き方を練習用プリントや身の回りの物の名前の文字付き絵カードなどの教材を使って行う。予習復習を課し、小テストをして定着をはかる。この時期にカナカナもアからンの46字を一通り導入するが、小テストでは自分の名前や国名を書けるようするという程度におさめる。もちろん、文字ばかりでは単調なので挨拶や日常の簡単なやりとりの表現、教室で使う表現なども加える。

学習者のニーズ、コースの目標などにより文字の指導も当然変わってくる。日本人と会話できることが主たる目的であれば文字の習得に不熱心なのを責めることはできない。その場合、ローマ字表記も併用しながら授業を行うこともある。

## 8. 動機づけの観点から文字指導に加えるべき工夫

国際交流基金（2011）は、日本語非母語話者である日本語教師のために開発された教授法の教材シリーズの1つであるが、動機付けという観点から文字指導に加えるべき工夫として次のようなものをあげている。（各項目に数字を振った。）

- （1）学習者の特性やニーズ、関心に合わせて、文字指導の方法や教材を選ぶ。
- （2）学習者にとって日本語の文字が、身近なものと実感できるように工夫する。
- （3）学習者が文字を覚えていくプロセスに楽しさを感じることができるようにする。
- （4）長く継続的に行う文字学習に、飽きずに取り組めるように、練習の方法にバリエーションを持たせる。
- （5）文字学習の到達目標を学習者に明示的に示し、自分がどの段階にいるのかわかるようにする。
- （6）文字学習の当面の目標を、学習者が自分もがんばればできると思える範囲に設定する。
- （7）学習者が「読めた」「覚えられた」「できた」と、達成感を感じることができるようにする。
- （8）学習者が文字を読めてよかった、書けるようになってよかったと満足感を味わえるよう

51 この留学生のコースについては、長崎大学国際教育リエゾン機構の松本久美子氏に聞いた。日本語は1週間5コマ（1日1コマ、90分）の選択科目。留学生でも大学院生で授業も指導教官との話もすべて英語という場合、日本語は必須というわけではなく、日常の生活場面や院生仲間と雑談するのに必要という程度になる。したがって文字の習得も必須ではないわけだが、日本で生活するのに文字が読めないと不便だし不安なものである。漢字も必要なものを少しは読めないと、エアコンのスイッチも押せないし、牛丼屋でメニューも読めない。漢字はパーツや文字のしくみを説明して興味を持たせるようにしているという。

な活動をする。

上の 8 つの項目のうち、(4) (5) (6) は漢字の指導も含めたものと考えられるが、それを除く項目は韓国語の文字指導にもあてはまるだろう。

はじめてハングルを習ったとき、パズルみたいで面白いと言う学生がいる。自分の名前をハングルで書いたり、町で見かけた標識のハングルが読めるようになったりして、それが喜びにつながる。ローマ字を使用する言語の学習からは得られない喜び、新しい言語への挑戦が実感できる部分である。しかし、しばらくするとそんな高揚感もなくなり、ハングルがなかなか覚えられない、書かれた文章がすらすら読めない、なんとなく言える表現を正確にハングルで表記できない、という悩みを訴えるようになる。作文の宿題を渡されると、書きたい表現の正確なハングル表記がわからないため、辞書で確かめることもできず、教科書の頁を何度も繰って探すことになる。ここで挫折してしまわないよう、文字と発音の導入の段階で基本的な運用能力をしっかりと身につけさせたい。「学習者が文字を覚えていくプロセスに楽しさを感じることができるようにする」ためには、ハングルの制字原理も一方的に講義するのではなく、学習者自らが原理を発見していけるような教材を準備し、学習者が主体的に課題に取り組めるような授業をすべきである。また、絵と文字とを組み合わせ、絵のイメージで字形と音を同時に覚える方法<sup>52</sup>や、カタカナや漢字の形の類似から語呂合わせで覚えたりする方法が独習用教材には多く示されている。このような方法を紹介してもいいし、学習者自身に絵や語呂合わせを考えさせてもいいだろう。

国際交流基金（2011）では、ひらがなの文字と発音を覚えるためのゲーム（文字カードを使ったカルタ取りや「神経衰弱」、五十音図パズル、文字の一部分だけ見せて当てさせるゲームなど）を紹介している。ハングルでは、JAKEHS 教室活動編集チーム（2009）が「ハングルナンブレ」やパズル、ハングルの法則探しゲームなどを、高明均・金昶寧（2007）が字母のカードを使ったパズルとゲームの他、発音練習に効果的な子どものための歌や詩、早口言葉などを紹介している。子どものための歌や詩は同じ子音や母音を反復するものが多く、唱えるだけで楽しめ、また「詩を楽しく読むことによって子音、母音、文字に関心を持たせ、正しい発音になれさせる」（日本語訳；川越）としている。

## 9. コミュニケーションのための文字と発音の指導

### 9.1 コミュニケーションの道具としての文字——求められる発想の転換

国際文化フォーラムが出した『高等学校の韓国朝鮮語教育の学習のめやす（施行版）』2007

52 これを連想法というが、この方法を使い 48 分でひらがなをすべて覚えるという Hiragana in 48 Minutes という英語話者向けの教材もある（Quackenbush, H. 他 1999）。カタカナの教材もある。

では、文字指導がコミュニケーションを目的とした言語教育の目的を見失わせていると批判して、「文字と発音は、確かに切り離せない関係にある。そのため、文字と発音は同一物であるような誤解が生まれ、文字学習を語学の出発点とする考え方がある。いわば文字を知らずしては、会話ができないし、文法を学べないという考え方である。(中略)口頭での会話は、文字によるやり取りではないから、必ずしも文字を必要とはしないはずである。口頭でのやり取り(会話)の道具が声だとするならば、文字は書面(デジタルを含む)でのやり取りの道具である。したがって、文字学習は、文字によるやり取りと切り離すことはできない。コミュニケーションを目標として明確化する語学教育においては、文字もまた、コミュニケーション活動の中に位置づけられなければならないのである。これまで、学習書や実際の授業において、コミュニケーションではない文字学習が多かったのではないか。コミュニケーションに位置づけられない文字学習方法が、文字に1ヵ月、2ヵ月とかかり、それでも文字を習得できない原因の一つであると考えられる。」とし、「会話の練習のために、伝えたい単語を口から発し、聞きたい単語を耳から入力して、意味のあるやり取りをするように、文字で、伝えたい単語を書き、読みとり、聞きたい単語を読むようにすれば、コミュニケーションが成立する」、また「音によって覚えてから、文字を導入するのが、学習者にとって理想的な学習法なのである」と強調する。そして、口頭だけである程度会話ができるようにした後、文字の導入をするやり方と、書く授業の中でまず口頭での導入、次いで文字でやりとりする方法を示している。

このような授業をするためには、当初から過度に発音の正確さを求めないことが必要になる。報告書では「発音もコミュニケーションの中で」習得すべきとして、「入門の最初から発音の細部にこだわって、例えば閉音節(パッチム)の練習に長い時間を費やしたり、平音と激音の区別をしつこく練習させるのは、学習者に、発話をためらわせる結果になり、語学には逆効果であろう」としている。その意味で、「発音と文字」の解説が詳しすぎる教科書を使う場合は教師は注意を要する。特に、パッチムに伴うさまざまな音韻規則は最低限覚えるべき部分、あとまわしにしていい部分を明確に示し、頁を飛ばして教えることも必要になる。入門用教科書に見られる音韻規則の提示の仕方には次のようなタイプがある。

- ・「発音と文字」の単元の最後にまとめて詳細に音韻規則を示し、練習問題も丁寧に加えているもの(金榮愛 2015 など)
- ・「発音と文字」の単元の最後にまとめているが最低限の語例と説明で示すもの(金順玉他 2014 など)
- ・有声音化以外の規則はすべて各課の本文に出てくる単語ごとに少しずつ提出して簡単な説明を加えるにとどめ、巻末に規則の一覧を掲載するもの(入佐信宏他 2002、新大久保語学院他 2010 など)

- ・有声音化と連音化以外はいっさい説明がなく、巻末付録に規則の一覧を加えるもの（光化門韓国語スタジオ 2010）

ほとんどの教科書がはじめの2つのタイプになっている。4つめの教科書では、新出語彙で表記と発音が異なるものは〔 〕内にハングルで発音を示すほかは説明がまったくない。この教科書は「コミュニケーションの育成に直結した」「シンプルで学びやすいテキスト」作成を目指したとし、教科書の構成も「発音と文字編」全6課、「準備編」全6課、「本編」全11課に分け、簡単な会話のやりとりからなる「準備編」を「発音と文字編」と平行して学習するように勧めている。発音変化の規則についても「習うより慣れよ」で初めのうちは気にせず、巻末の「発音変化のルール」は、「本書の学習が終わる頃見てください。そのころにはすでに多くの発音変化の例に接しているので、説明を読めば、知識を整理できるでしょう」とある。文法についても例文、練習問題を通して自然にルールが見つかり、理解できるとあるように、帰納的学習を重視したものである。この教科書はやや極端にも見えるが、コミュニケーション能力の習得を第一の目的とし、「文字と発音」の単元の部分で学習者の負担をできるだけ軽減しようとするなら、“常識”と考えてきた教え方を思い切って見直すことが必要だろう。

韓国語を学ぶ高校生、大学生の中には K-POP が好きで、歌詞の対訳を見て意味を理解するのではなく、直接韓国語で知りたいという動機で学び始めた者も多い。好きな歌を繰り返し聞き、自分でも歌えるくらいなので、韓国語学習を文字からでなくまさに音から始めたということになる。このような学習者は上達も早いですが、中には言えば通じるから正確に書けなくてもかまわないと偏った言語技能の運用能力で満足してしまう学習者もいる。そうならないよう、手紙やメールのやりとりをするなど「文字をコミュニケーションの道具として」扱う楽しさも同時に知らせたいものである。

## 9.2 「文字なし授業」の実践例報告

韓国語がまったくゼロの学習者に文字と発音の導入から始めるのではなく、文字を（ハングルはもちろん、カタカナもローマ字も発音記号も）いっさい使わず行う授業の報告もある。以下に、長渡陽一（2010）で行われた「文字なし授業」の手順を簡略化して引用する。

- ・クラスの生徒数 10 人。週 1 回、50 分授業
- ・5 回の授業、教科書の 1 課から 4 課に対応する内容。
- ・教材は、見出しなどは日本語で書かれ、学習事項や単語は主に絵で示されている。
  - 1 課 自己紹介、あいさつ
  - 2 課 「朝、なに食べた？」昨日／今日、何を食べ／飲みましたか？
  - 3 課-1 「どこに行きましたか？」

3 課-2 「宿題、やった？」何をしましたか？

4 課 「どこに行くの？」今日／明日どこに行きますか？

・手順：

(1) 前回の復習 (3 分)

(2) 今日の授業で到達すべき目標を伝える (1 分)

(3) 質問文の提示とリピート練習 (1 分)

(4) 質問と答えの練習 (10 分) 教師→生徒、生徒→生徒。

必要な語彙は日本語で生徒が言い、教師が韓国語で口頭で与える。

(5) 答え (単語) の整理と復習のための練習 (5 分)

(6) ペアワーク (10 分) 生徒同士で質問と答えがすらすら言えるようにする。

(7) 前回までの会話と合わせて総合練習 (10 分)

(8) 復習とまとめ (10 分) 到達度確認のため生徒を指名して同じ会話を言わせる。

日本語で「今日は～が言えるようになった」と達成した目標の確認。

指導上のもっとも重要な留意点は、授業中、メモ禁止を徹底させる (筆記具はしまわせる) ことである。学習者は間違えたり忘れたりしても教師が何度でも言ってくれることを知っており、安心感を得られる。また、教師は学習者の発音を過度に訂正することを避け、互いにやりとりができていれば許容範囲とするという。

そして、「なぜ文字なし授業を提案するのか」という理由について次の4点をあげている。(内容をまとめて引用する。)

- ① 「情意フィルター」を下げて十分なインプットを可能にするため。
- ② メモに頼らず教師の声に集中させる。
- ③ 話す・聞く時間を十分に確保するため。
- ④ 発話の成否を確認し、話せたという実感をできるようにするため。

動機づけを高く保つためには④は重要である。発話の成否とは、自分の言ったことが相手に通じ、相手の言ったことが理解できたということである。話せたという実感を持つには、教師から与えられた表現をそのまま反復するだけではなく、自分が言いたいこと (実際に今日の昼に何をどこで食べたか、など) を言えたことで「話せた」と思えるのである。また、興味深いのは②で、メモを許すと学習者は教師の口元を見ずにうつむいてノートを見、カタカナでメモをするため、その後はカタカナを読むようになって、教師の発音をまねしなくなるという。

このコースでは、こうしてここで「習得した単語や文を、次の単元でハングルによる読み書

きを学び、文字によるコミュニケーションへつなげる」という。

日本語教育の初級の授業では、授業中は教科書をいっさい開かないという方法をとる教師もいる。文字が全く未習で行うというわけではないので、文字の導入の前に行う完全な「文字なし授業」とは異なるが、まず耳で聞き覚えて、その後で文字で確認するという考え方は共通しているだろう。

入門レベルの日本語学習者にひらがなで書かれた教科書<sup>53</sup>を読ませると、あまりにたどたどしくて時間がかかりすぎるということがよくある。また板書をする学習者はそれをメモしようとするので、メモが終わるまで教師は黙って待つことになってしまう。したがって、板書は最低限にとどめ<sup>54</sup>、文型練習は絵パネルやフラッシュカード（単語をひらがなで書いたもの、必要があればローマ字併記したもの）などを見せながら口頭で行う。書くことや読むことにとられると会話らしい会話ができなくなるのである。

## 10. おわりに

ほとんどの教科書が最初の4分の1ほどを「文字と発音」が占めている。学習者は教科書を開いて、学ぶ前からこんなに発音が大変なのかとってしまうのではないか。外国語教育がラテン語教育のような知的訓練や教養のためではなくコミュニケーションの道具とすることを目的としているなら、教科書のはじめに文字の仕組みや発音の体系と規則を網羅的に提示することはやめるべきだろう。新大久保語学院他（2010）の教科書は現在広く使われているものだが、目次の文字と発音の単位には、「たった4レッスンで韓国語が読める!!」とある。発音を取り立てて詳しく学びたい学習者は発音だけの教材を見ればよい。

単母音8個型と基本母音字10個型のどちらがより学習効果を高めるかは実際の授業での検証を必要とするが、文字と発音の単位をいかに縮小するか、コミュニケーションの道具として文字を導入するにはどう授業をすればいいかという課題はどちらの立場を取るにしても第一に考えなければならないことである。教師が教科書を作る場合、自分が教え慣れた方法と教材を使って作ることが多いだろうが、他の韓国語教師と情報を交換し合い、よりよい授業のための教材研究を共同して行うことが求められているだろう。

今回は韓国で開発された教科書をほとんど見ていない。その分析は今後の課題としたい。

53 音声言語に集中できるよう、ローマ字で導入する入門教科書もあったが、今でははじめから漢字仮名交じりで漢字に読み仮名が振られているのが一般的で、別にローマ字（ヘボン式）で読みを表記しているものもある。ローマ字表記があまり奨励されないのは、拍感覚を早く身につけるため、ローマ字による発音の影響を抑えるためである。

54 未習で特殊音節（促音、撥音、長音）を含むものや清濁が問題になる単語は聞き取りが難しいので板書して文字で確認する。また、中国語母語話者は新しい単語を耳にしたとき、漢字を使うかどうかを気にする。

## 韓国語の「文字と発音」導入の問題について

### 分析した教科書

- 李昌圭（2012）『しくみで学べるテキスト 韓国語へ旅しよう 初級』朝日出版社
- 李潤玉・酒勾康裕・須賀井義教・陸宗均・山田恭子（2012）『改訂版 韓国語の世界へ 入門編』朝日出版社
- 入佐信宏・文賢珠（2002）『よくわかる韓国語 step 1』白帝社
- 生越直樹・曹喜澈（2011）『韓国朝鮮語初級テキスト ことばの架け橋 改訂版』白帝社
- 河村光雅（2013）『韓国語ポイント 50』白水社
- 木内明（2013）『基礎から学ぶ韓国語講座初級 改訂版』国書刊行会
- 金順玉・阪堂千津子（2014）『最新チャレンジ！韓国語』白水社
- 金順玉（2015）『NHK テレビでハングル講座』2015 年 4 月号、NHK 出版
- 金智賢（2015）『教養韓国語初級』朝日出版社
- 金東漢・張銀英（1999）『韓国語レッスン 初級Ⅰ』スリーエーネットワーク
- 金榮愛（2015）『楽しく学ぼう！韓国語攻略本 基礎編』駿河台出版社
- 熊谷明泰（2015）『初級韓国朝鮮語教材 アリラン 改訂版』朝日出版社
- 光化門韓国語スタジオ（2010）『シンプル韓国語 入門編』アルク
- 新大久保語学院・李志暎（2010）『新装版 できる韓国語 初級Ⅰ』DEKIRU 出版
- 曾我祐典・池貞姫（2006）『使える朝鮮語 改訂版』白水社
- 高秀賢（2006）『ミニマム韓国語』国書刊行会
- 高島淑郎（2002）『書いて覚える初級朝鮮語 改訂版』白水社
- 崔柄珠（2014）『おはよう韓国語 1』朝日出版
- 塚本秀樹・岸田文隆・藤井幸之助・植田晃次（1996）『グローバル朝鮮語』くろしお出版
- 野間秀樹・金珍娥・中島仁・須賀井義教（2010）『きらきら韓国語』同学社
- ブルチョウ吉岡美愛・李英和（2012）『韓国語ゴーゴー』白水社
- 布袋敏博・沈元燮・李美江（2008）『学ぼう 韓国・朝鮮語 入門・初級編』アルク
- 梁貞模・盧載玉（2005）『初級ハングルーコミュニケーションのためにー』新幹社

### 参考教科書

- 小倉紀蔵（2007）『最もシンプルな韓国語マニュアル』アルク
- カナタ韓国語学院（2006）『가나다 Korean for Japanese 初級 1（改訂版）』Language Plus
- 兼若逸之（2007）『らくらく韓国語マスター』アルク
- 慶熙大学国際教育院『日本人のための韓国語ナビ 1 初級』国書刊行会 2009
- 木内明（2004）『基礎から学ぶ韓国語講座 初級』国書刊行会
- スリーエーネットワーク編著（2012）『みんなの日本語 初級Ⅰ第2版 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著（2012）『みんなの日本語 初級Ⅰ第2版 翻訳・文法解説英語版』スリーエーネットワーク
- チョ・ヒチョル（2011）『1 時間でハングルが読めるようになる本 ヒチョル式調速ハングル覚え方講義』Gakken
- ちょん・ひょんしる『やさしくはじめる韓国語』白水社
- 野間秀樹・村田寛・金珍娥（2008）『はばたけ！韓国語』（第2版）朝日出版社
- 서강대학교 한국어교육원『서강 New 한국어 1 A Student's book』2013

### 参考文献

- 梁炫玉（2008）「日本語を母語とする韓国語学習者のための韓国語の発音教育－入門期学習者のための母音・子音の発音教育に関して－」『大阪経大論集』第 59 巻第 2 号
- 梅田博之監修 李翊燮・李相億・蔡琬著 前田直彦訳（2004）『韓国語概説』大修館書店
- カッケンブッシュ寛子・中條和光・長友和彦・多和田眞一郎（1989）「50 分ひらがな導入法－『連想法』と

- 『色つきカード法』の比較』『日本語教育』69号、日本語教育学会
- 菅野裕臣著 浜之上幸・権谷環改訂(2007)『朝鮮語の入門 改訂版』白水社
- 金思燁(1981)『古代朝鮮と日本語 改訂増補版』六興出版
- 金珍娥(2007)「韓国語のローマ字表記法」野間秀樹編著(2007a)所収
- 金泰虎(2000)「日本における韓国語学習用テキストの発音表記と学習者」『東アジア研究』大阪経済法科大学アジア研究所28号
- 金泰虎(2006)『韓国語教育の理論と実際』白帝社
- 高明均・金昶寧(2007)「언어유희를 활용한 교수학습의 방안——외국어로써 조선어 교육을 중심으로——言語遊戯を利用した教授法の方案——外国語として朝鮮語教育を中心に——」『関西大学外国語教育研究』第14号、関西大学
- 熊谷明泰(2000)「朝鮮語教育と学習書の現状について－母音解説で見られる問題点を中心として－」『関西大学研究センター報』26号
- 熊谷明泰(2007)「朝鮮語辞典におけるカタカナ発音表記」野間秀樹編著(2007a)所収
- 国際交流基金(2011)『日本語教授法シリーズ3 文字・語彙を教える』ひつじ書房
- 国際日本語研修協会(1999)『やさしい日本語指導7 文字／表記』凡人社
- 国際文化フォーラム(2005)「日本の学校における韓国朝鮮語教育－大学等と高等学校の現状と課題－」
- 国際文化フォーラム(2007)「高等学校の韓国朝鮮語教育の学習のめやす(施行版)」
- 宋喆儀(2009)「反切表と伝統時代のハングル教育」油谷幸利先生還暦記念論文集刊行委員会編(2009)所収
- 趙義成(2007)「文字と発音の指導法」野間秀樹編著(2007a)所収
- 趙義成訳注(2010)『訓民正音』平凡社
- 中村完(1988)『ハングル初歩の初歩』大修館
- 長渡陽一(2009)『韓国語の発音と抑揚トレーニング』アルク
- 長渡陽一(2010)「入門期に、文字なしで、どんな授業が可能か」『朝鮮語教育－理論と実践－』第5号、朝鮮語教育研究会
- 野間秀樹編著(2007a)『韓国語教育論講座』第1巻、くろしお出版
- 野間秀樹(2007b)「音声学からの接近」野間秀樹編著(2007a)所収
- 野間秀樹(2008)「朝鮮語の教科書が目指すもの」『外国語教育研究』11号、外国語教育学会
- 朴永濬・柴政坤・鄭珠里・崔旻鳳著 中西恭子訳(2007)『ハングルの歴史』白水社
- 福井玲(2013)『韓国語音韻史の探究』三省堂
- 前田直彦(2013)『韓国語発音クリニック』白水社
- 湯谷幸利(2007)「朝鮮語母語話者による朝鮮語教育－何が問題か－」野間秀樹編著(2007a)所収
- 油谷幸利先生還暦記念論文集刊行委員会編(2009)『朝鮮半島のことばと社会 油谷幸利先生還暦記念論文集』明石書店
- JAKEHS 教室活動編集チーム(2009)『すぐに使える韓国語アクティビティ45』白帝社
- Quackenbush, H. and M. Ohso(1999) *Hiragana in 48 Minutes*, Curriculum Development Centre, Canberra